平成30年6月28日

病理細胞診研究班

第２回　症例検討会

症例１（解説）

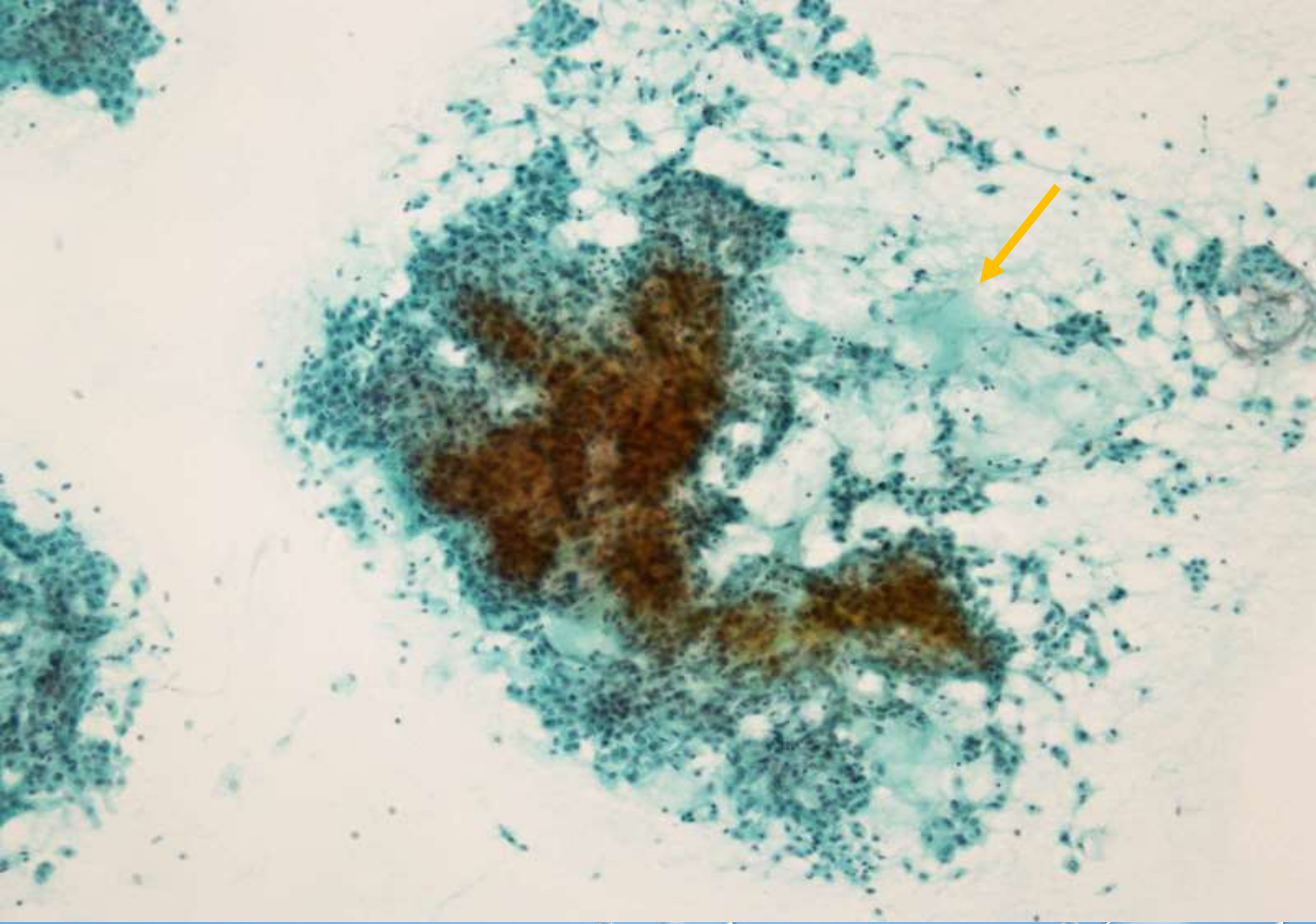
熊本赤十字病院　病理診断科

境　一

Japanese red cross
Kumamoto hospital

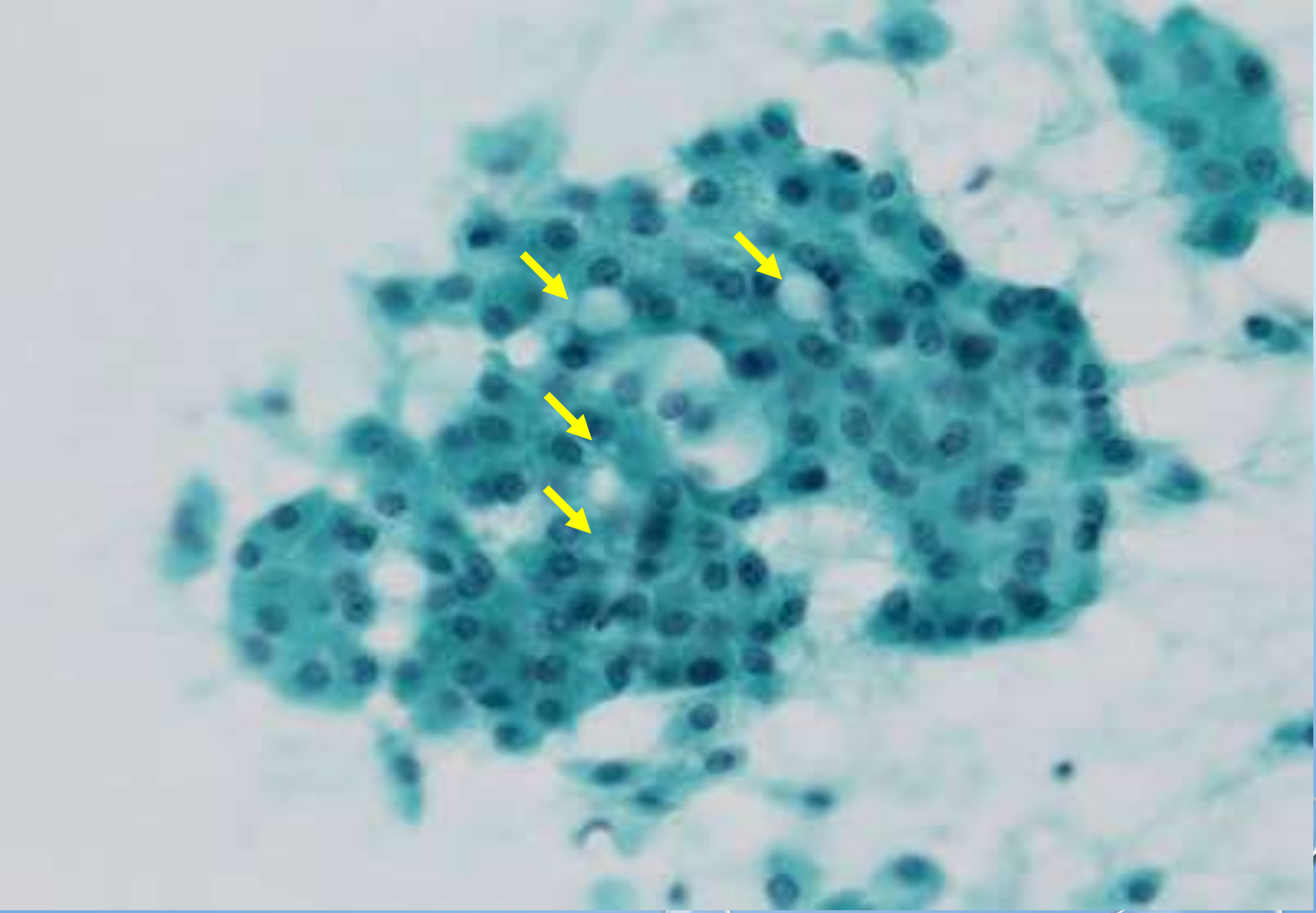
症例

- 患者年齢：60歳代
- 患者性別：男性
- 検体材料名：左顎下腺穿刺
- 現病歴：健康診断で左頚部の腫瘤を指摘されて来院。エコー検査で左顎下腺尾部に突出する腫瘤を認めた。石灰化を伴っており、悪性が疑われた。



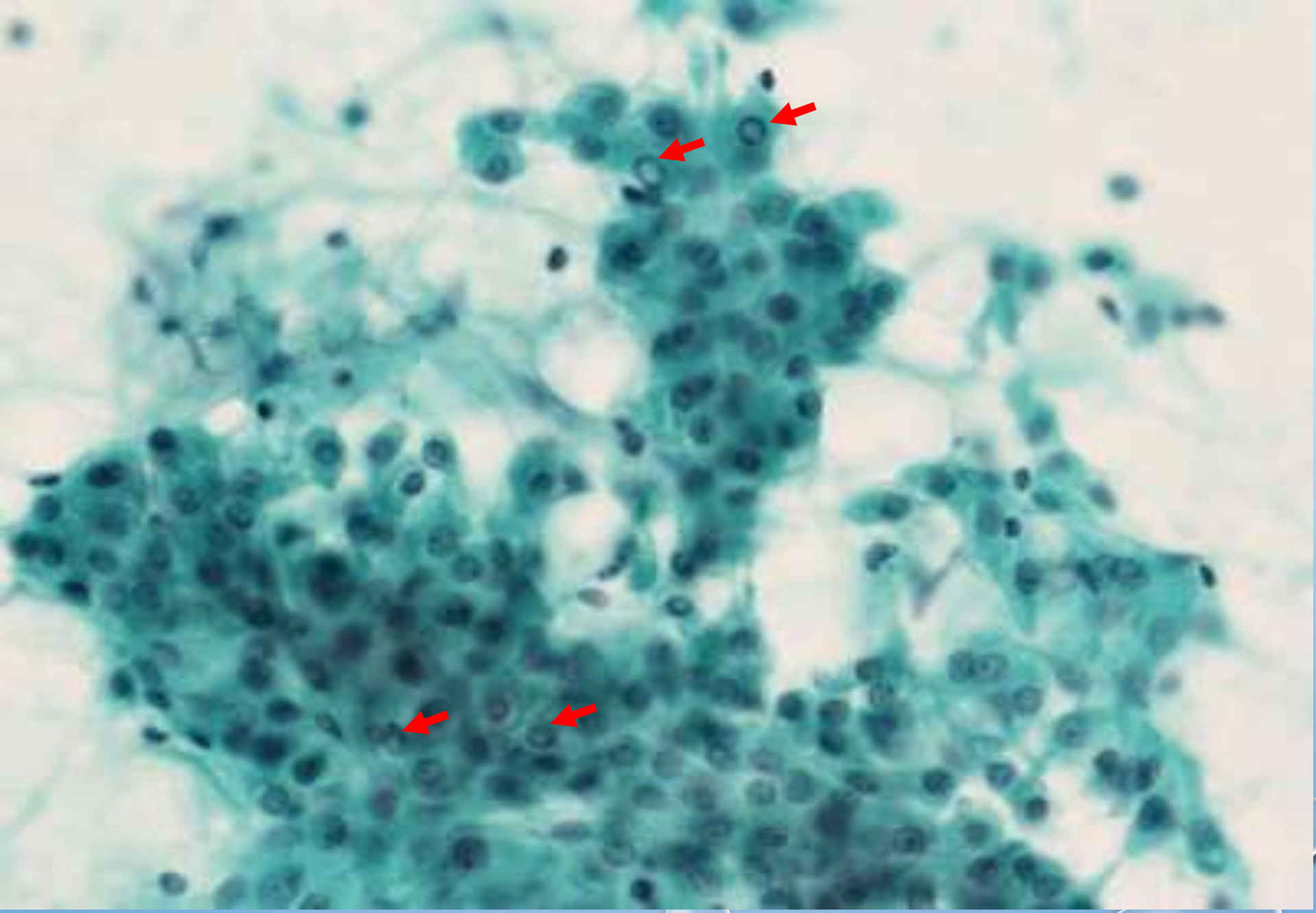
Pap ×100

Japanese red cross
Kumamoto hospital



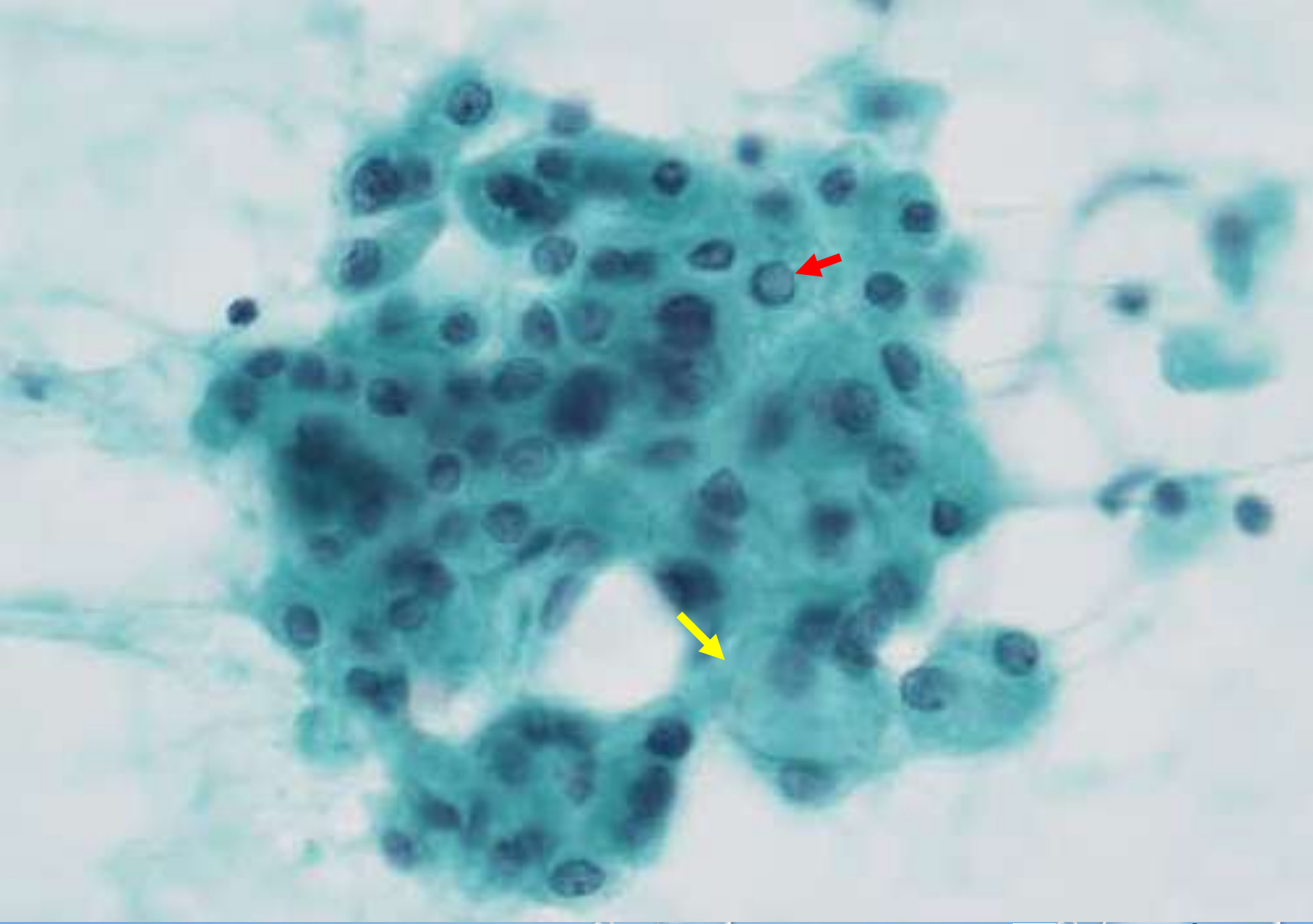
Pap ×400

Japanese red cross
Kumamoto hospital



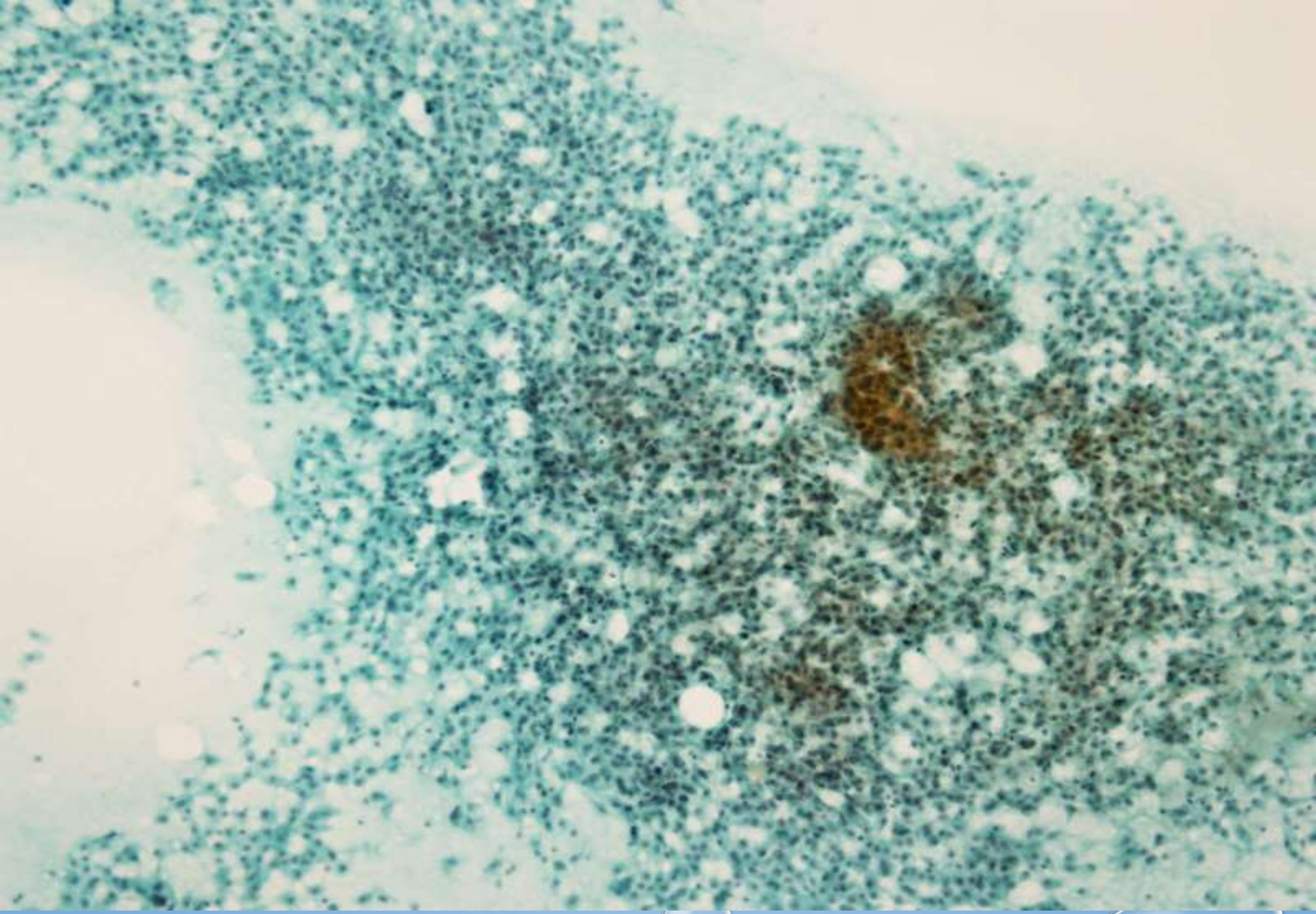
Pap ×400

Japanese red cross
Kumamoto hospital



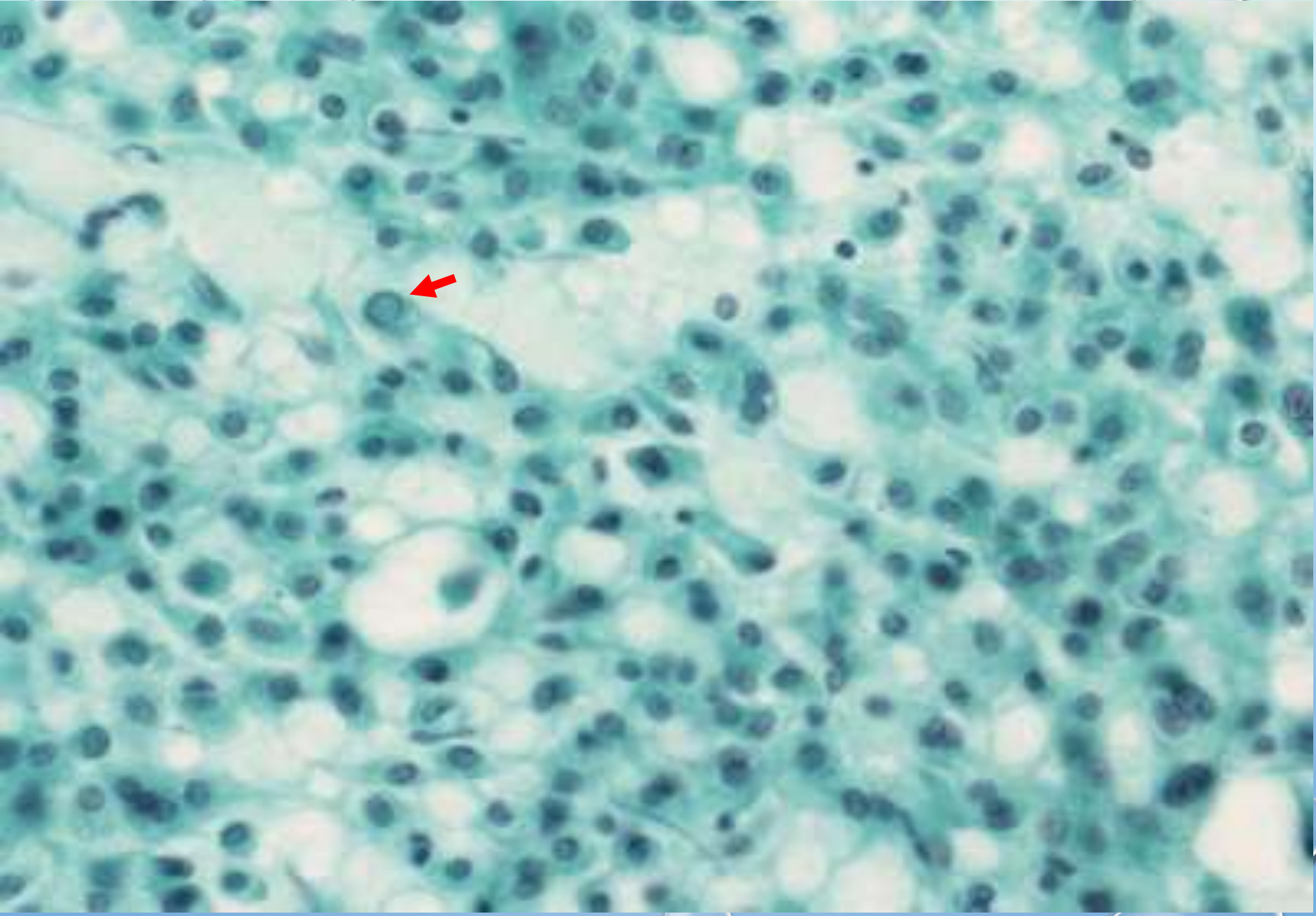
Pap ×600

Japanese red cross
Kumamoto hospital



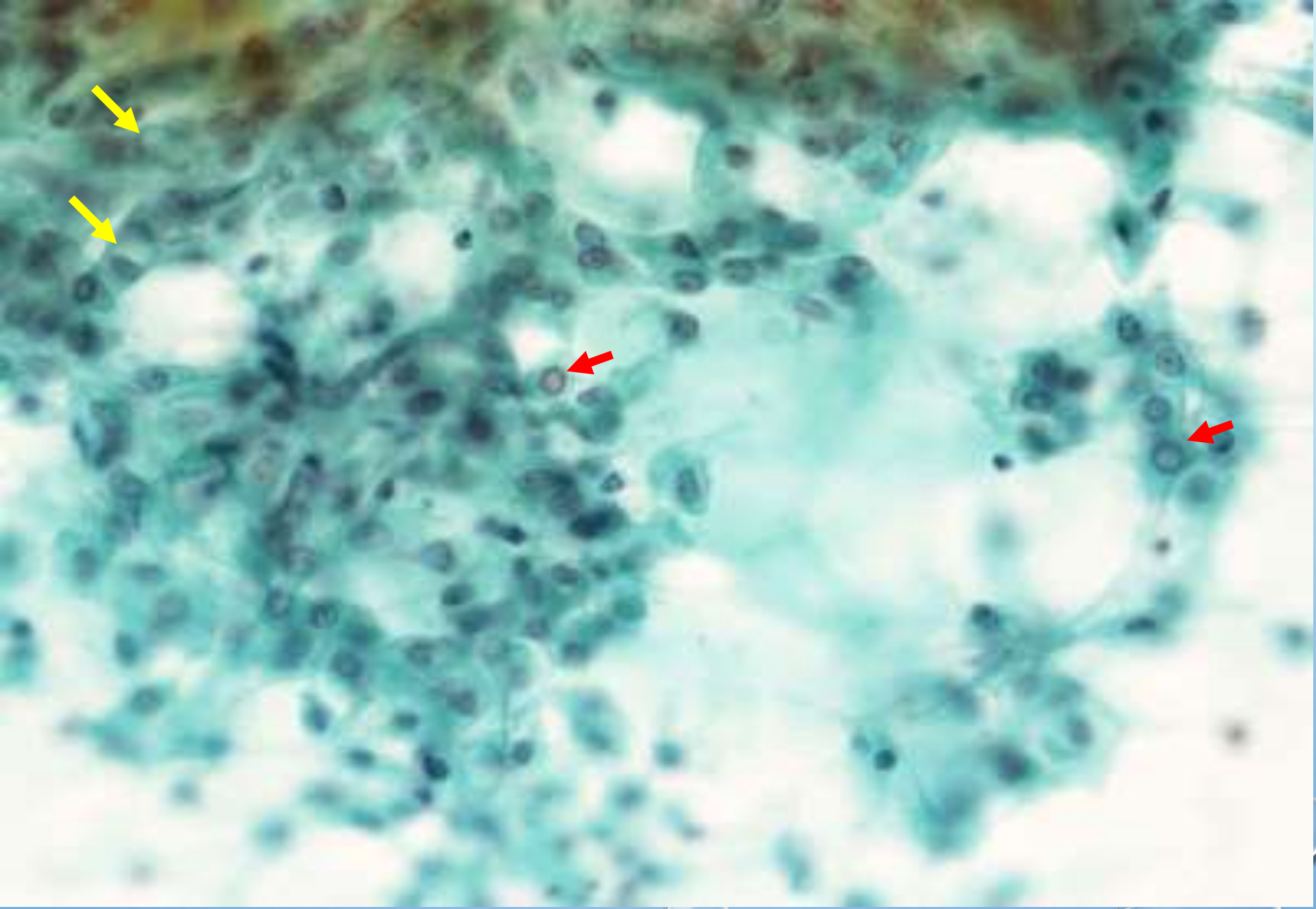
Pap ×100

Japanese red cross
Kumamoto hospital



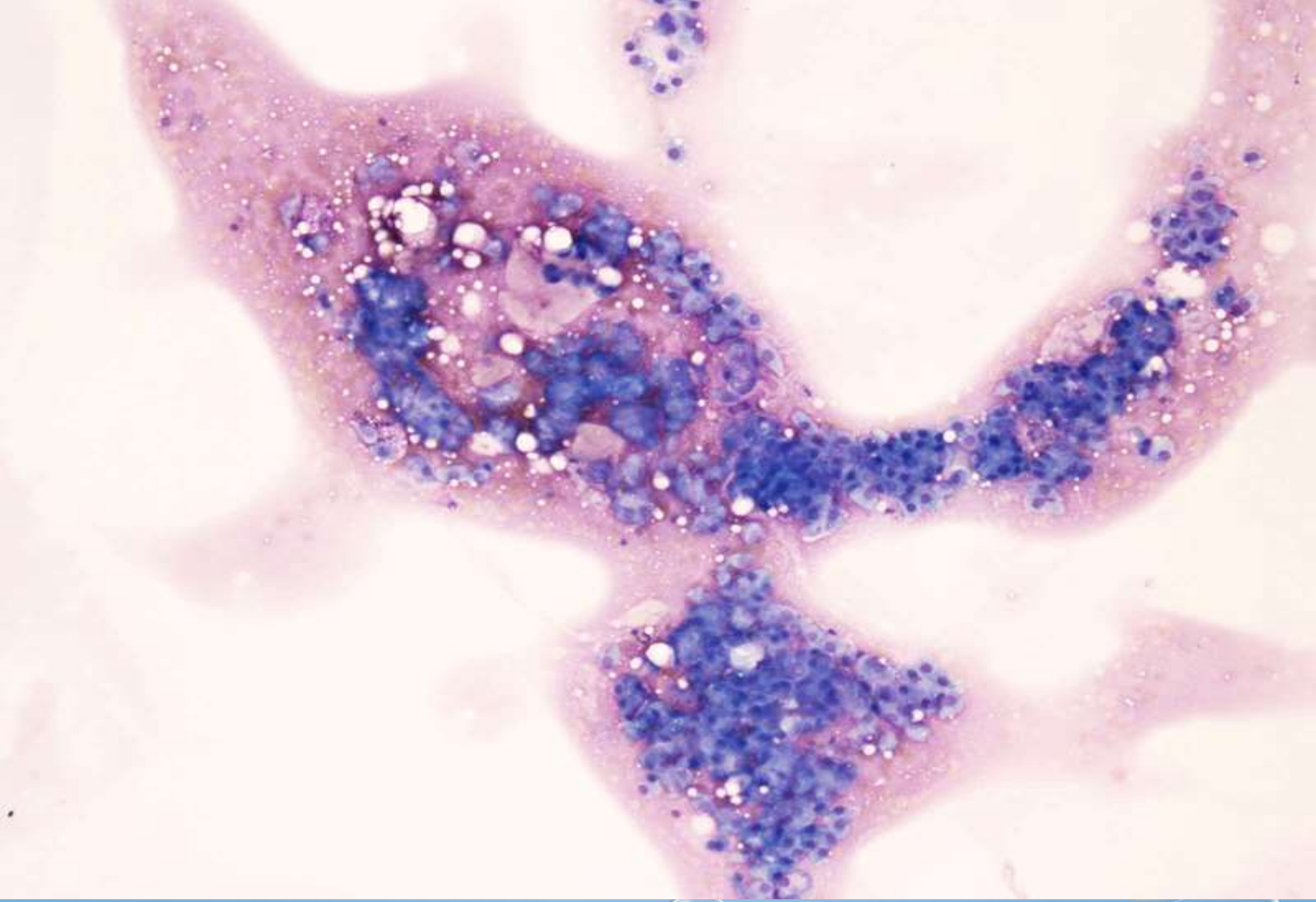
Pap ×400

Japanese red cross
Kumamoto hospital



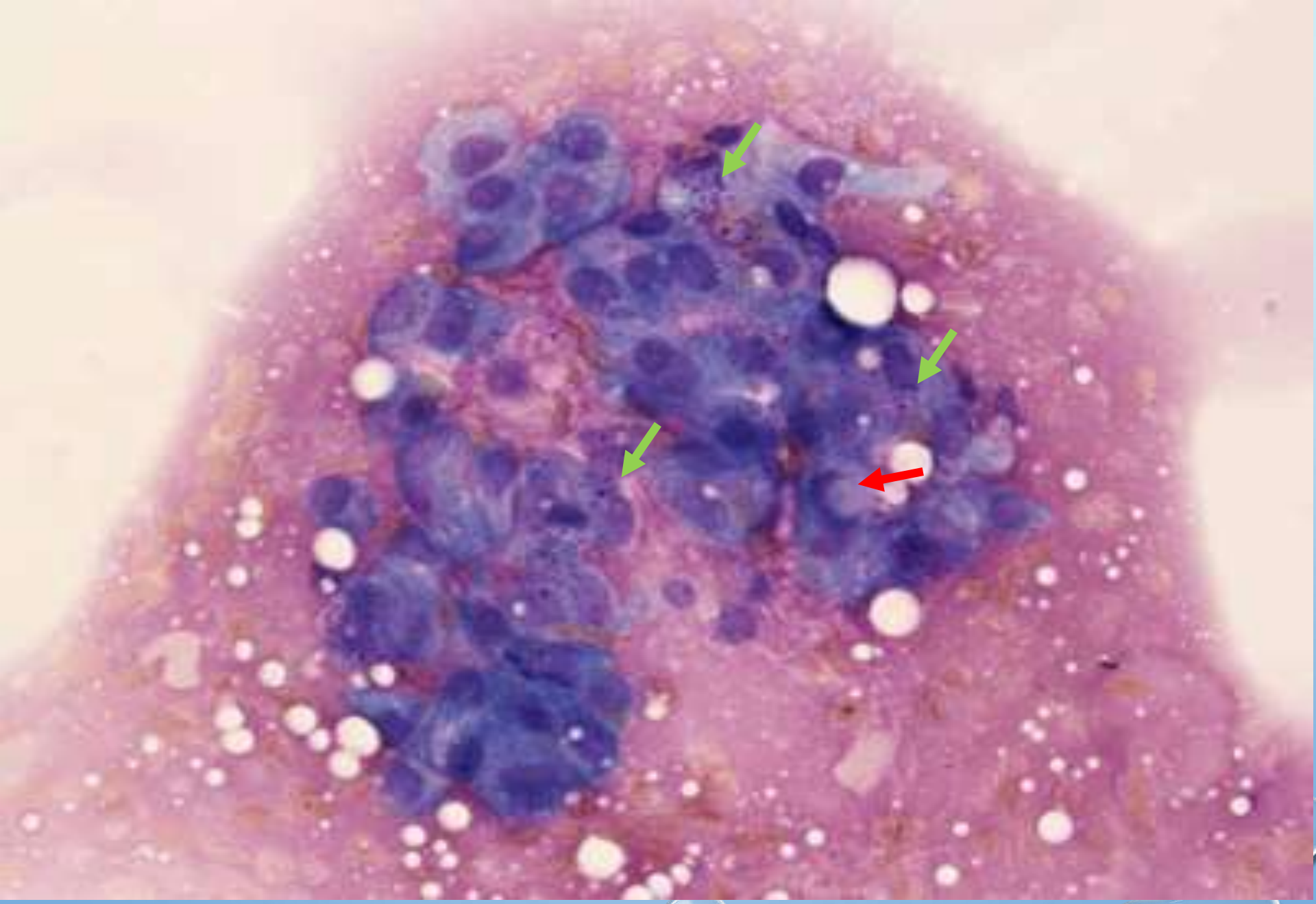
Pap ×400

Japanese red cross
Kumamoto hospital



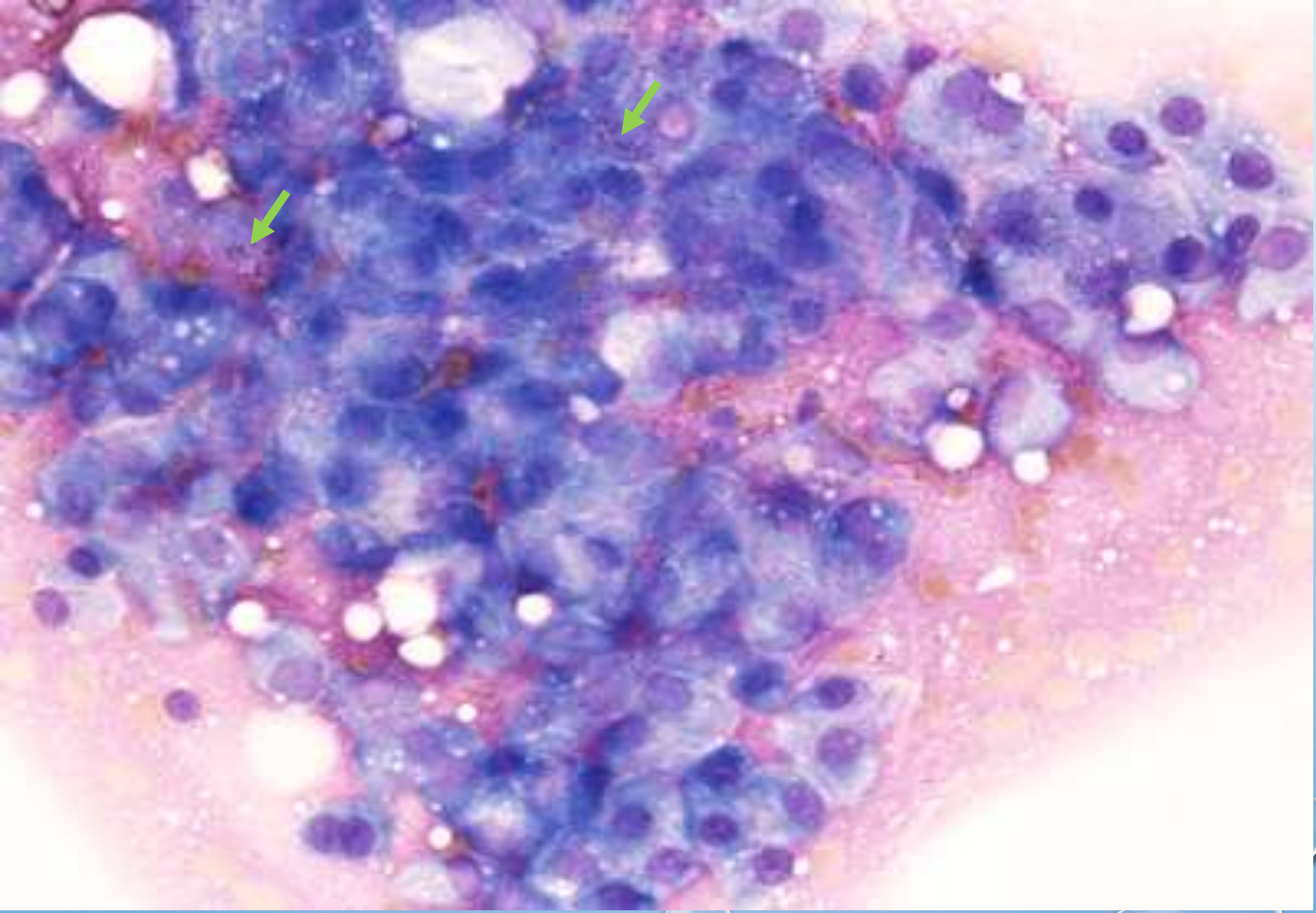
May-Giemsa ×100

Japanese red cross
Kumamoto hospital



May-Giemsa ×400

Japanese red cross
Kumamoto hospital



May-Giemsa ×400

Japanese red cross
Kumamoto hospital

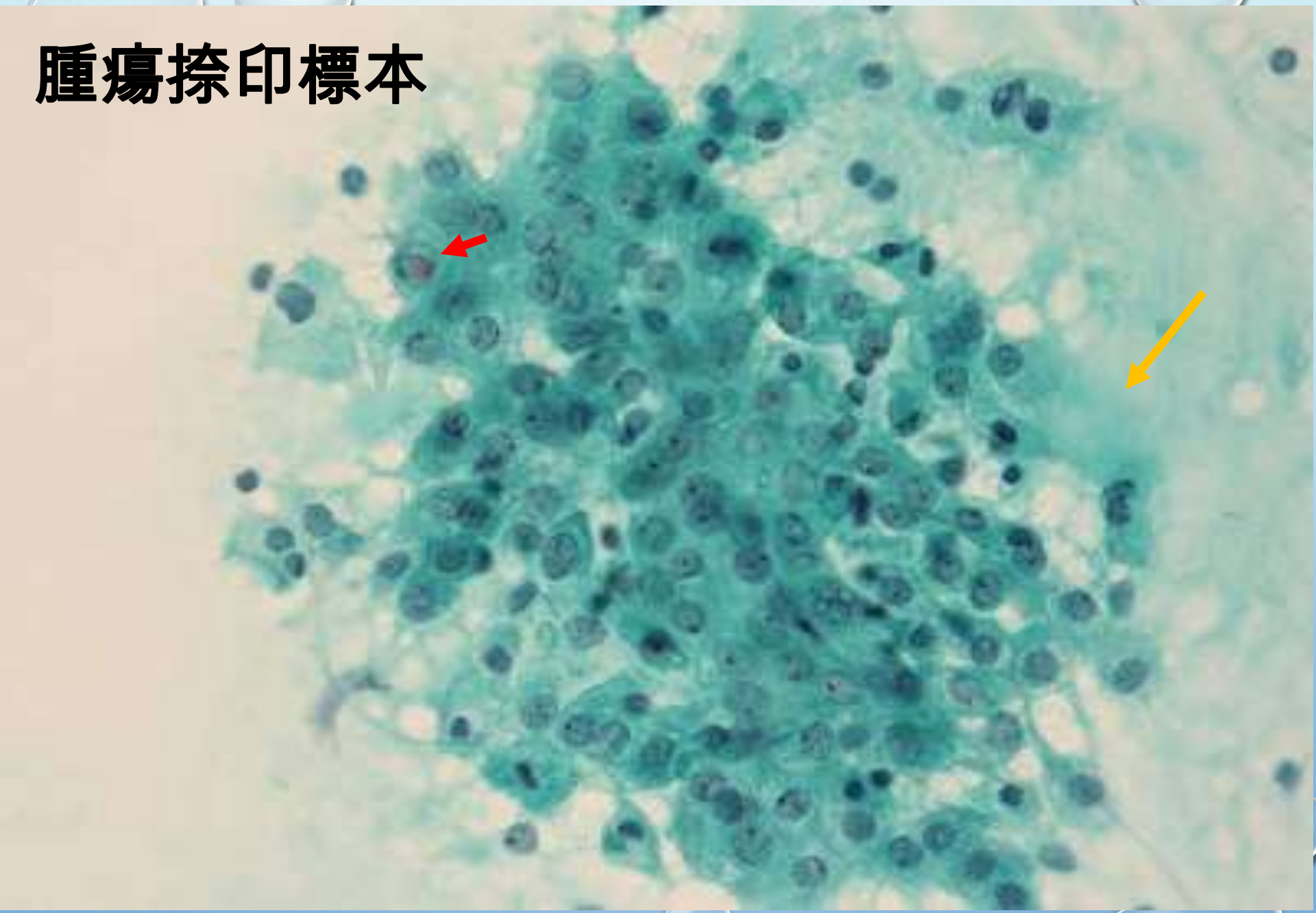
細胞診判定

鑑別困難：Neoplastic lesion

少数のリンパ球や正常唾液腺細胞を背景に、低N/C比で、核は円形～類円形で微細なクロマチンパターンを示すmonotonousな異型細胞が孤立散在性～集塊で多数出現しています。細胞質は顆粒状。一部には重積性を示す大集塊や核内細胞質封入体、核小体がみられます。核分裂像はほとんどみられませんが、出現細胞は均一で、腫瘍性病変と考えます。
組織型は、筋上皮腫、オンコサイトーマ、oncocytic carinomaなどが考えられますが、低分化の甲状腺乳頭癌も鑑別に上がる細胞像です。

→摘出術が施行された。

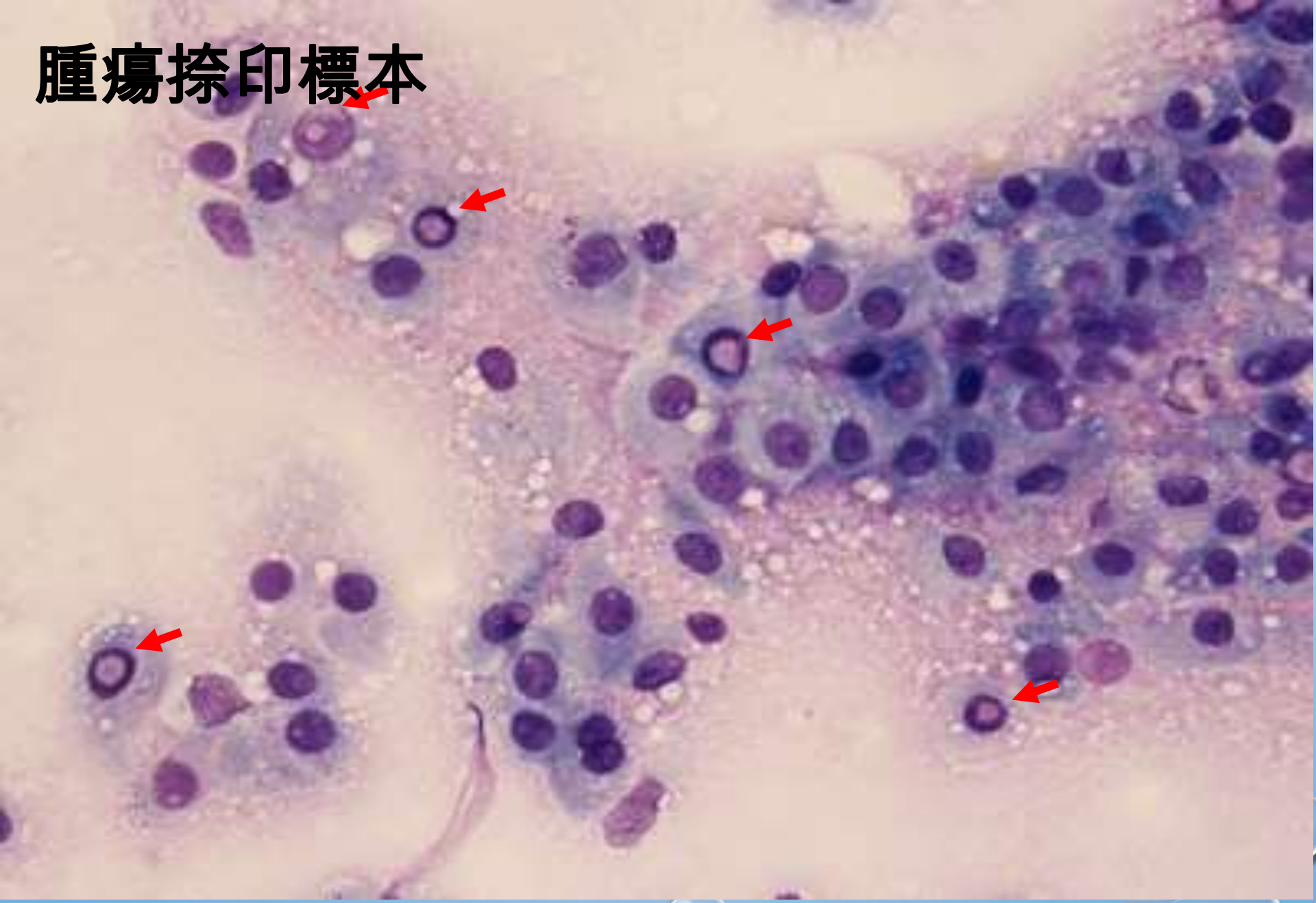
腫瘍捺印標本



Pap　×400

Japanese red cross
Kumamoto hospital

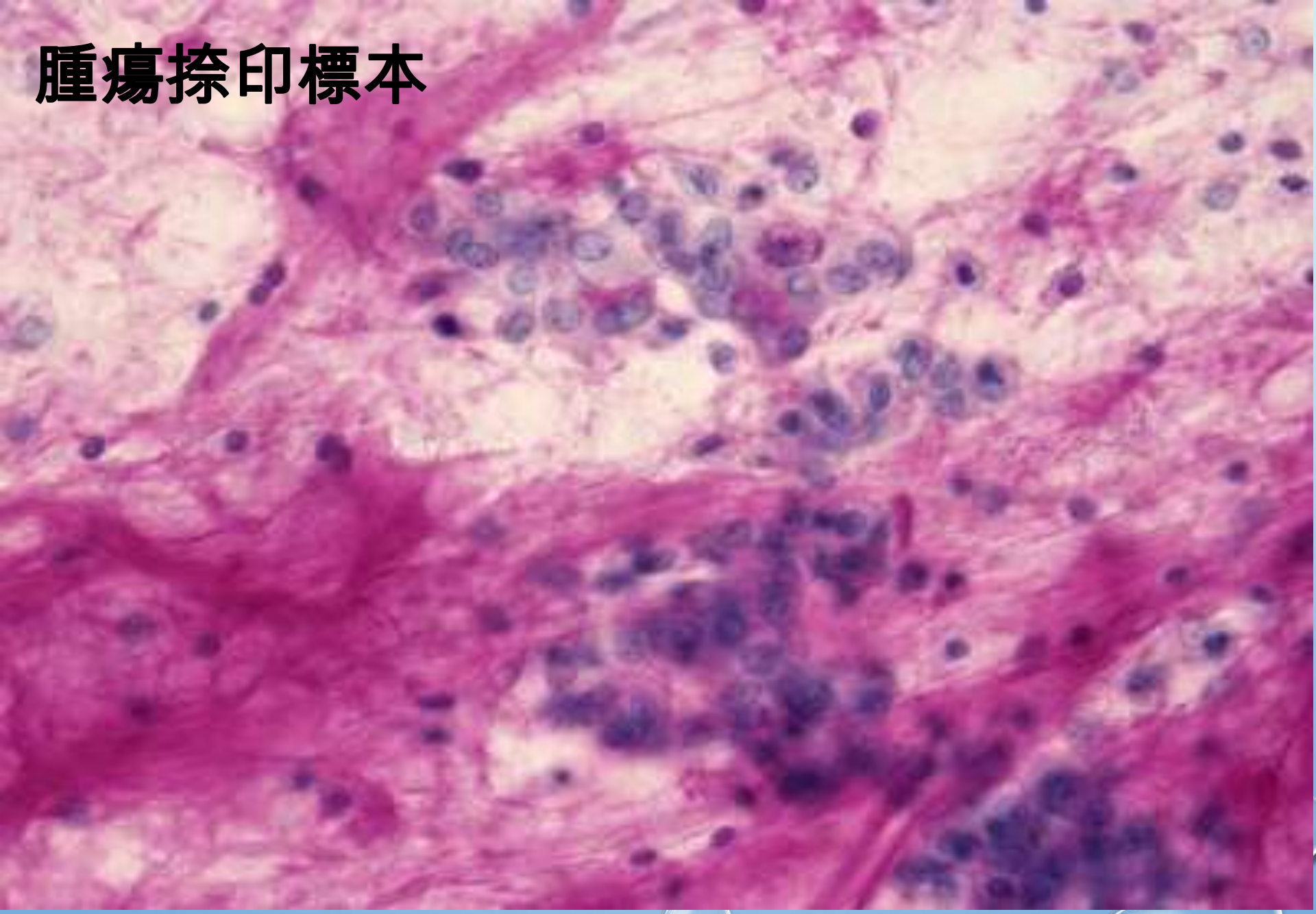
腫瘍捺印標本



May-Giemsa　×400

Japanese red cross
Kumamoto hospital

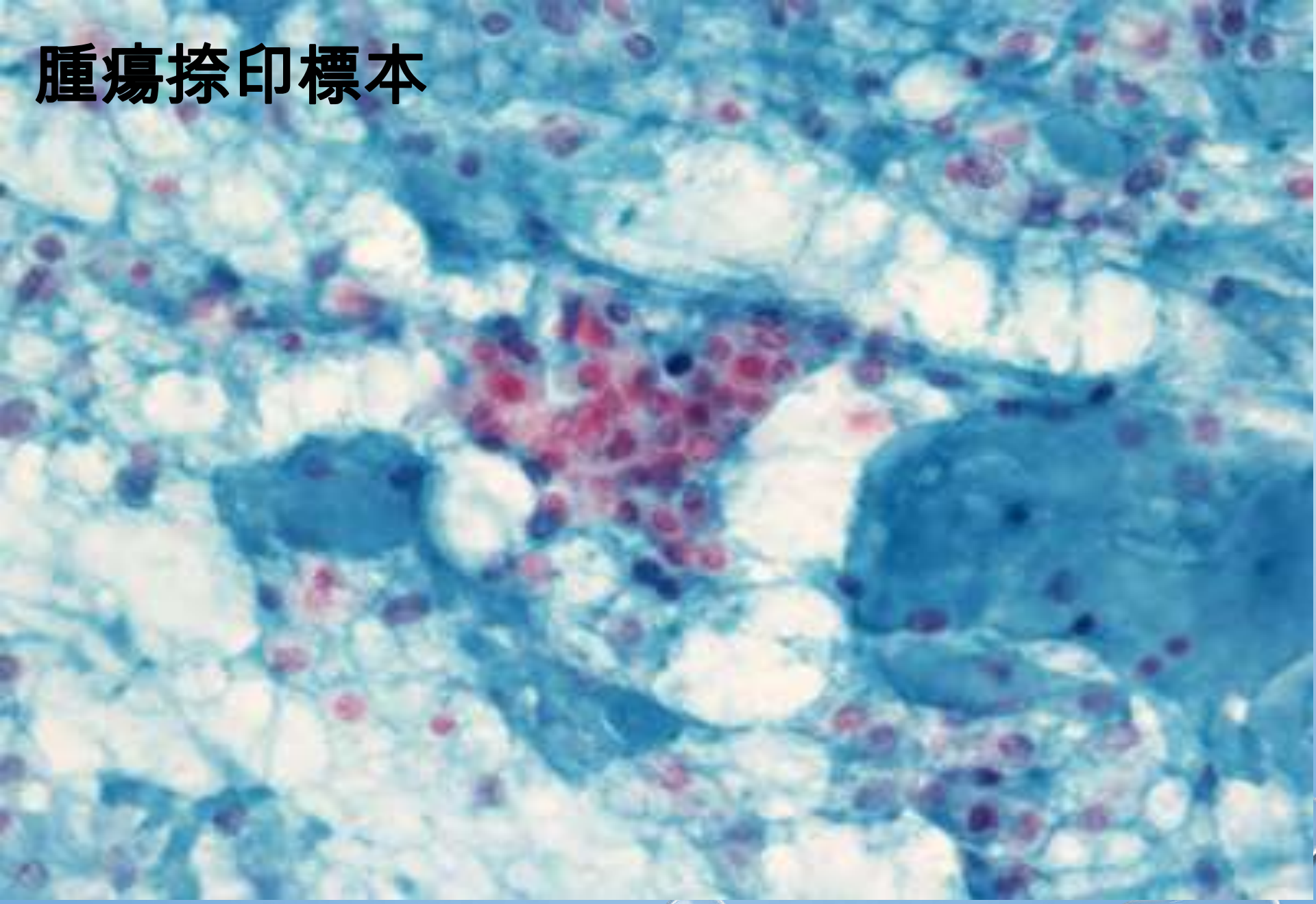
腫瘍捺印標本



PAS　×400

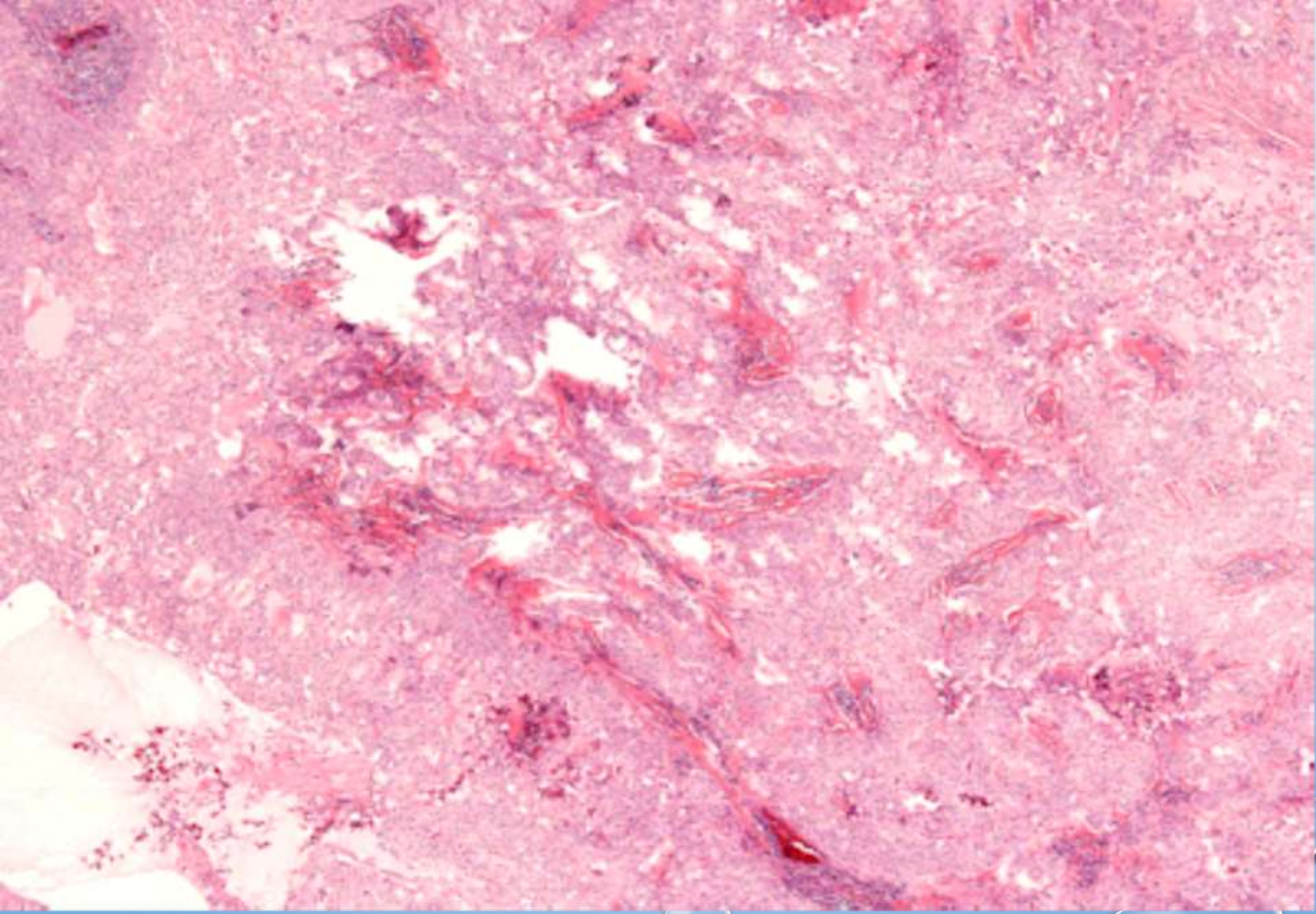
Japanese red cross
Kumamoto hospital

腫瘍捺印標本



Alcian blue　×400

Japanese red cross
Kumamoto hospital



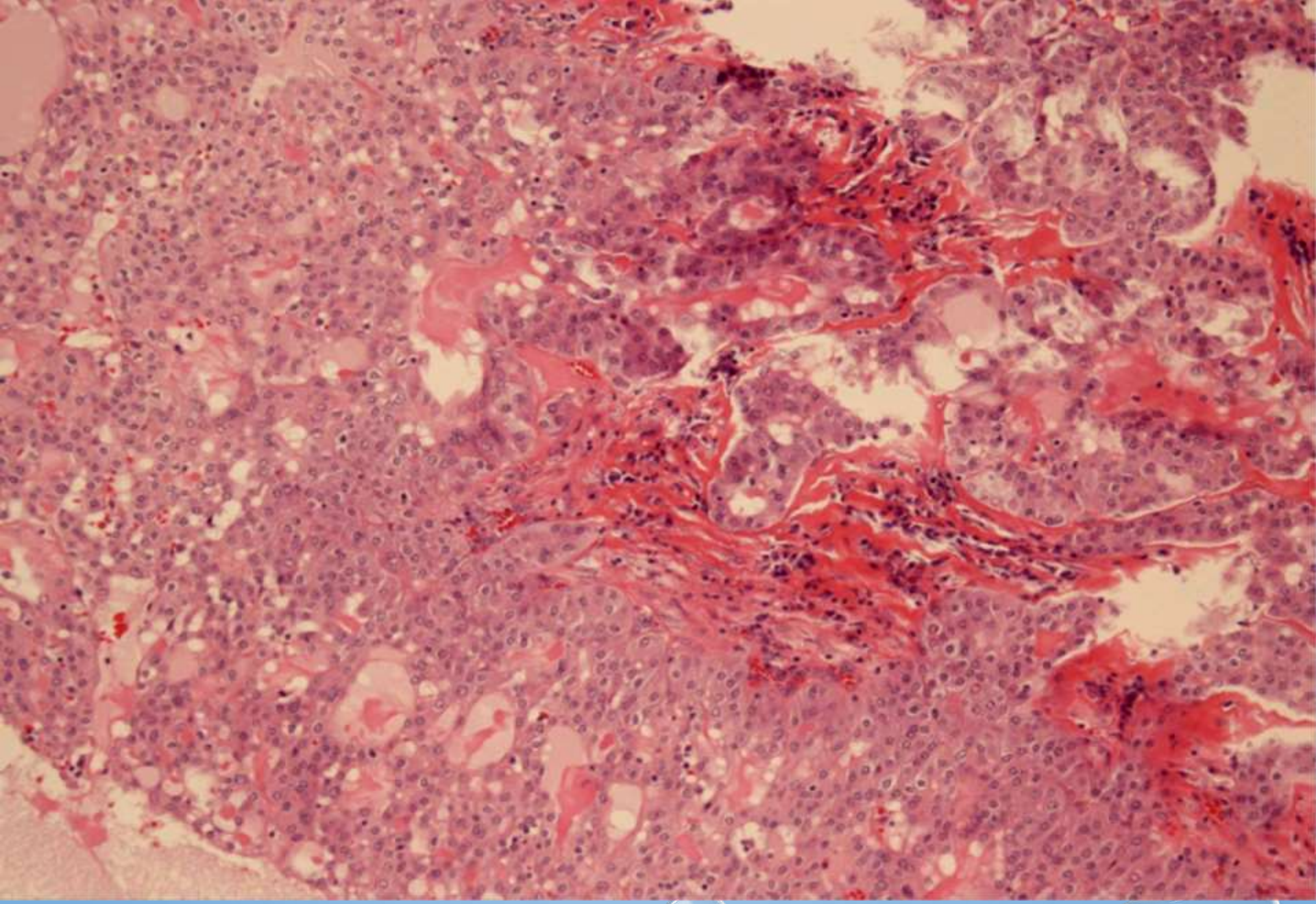
H E ×40

Japanese red cross
Kumamoto hospital

術中迅速組織診断

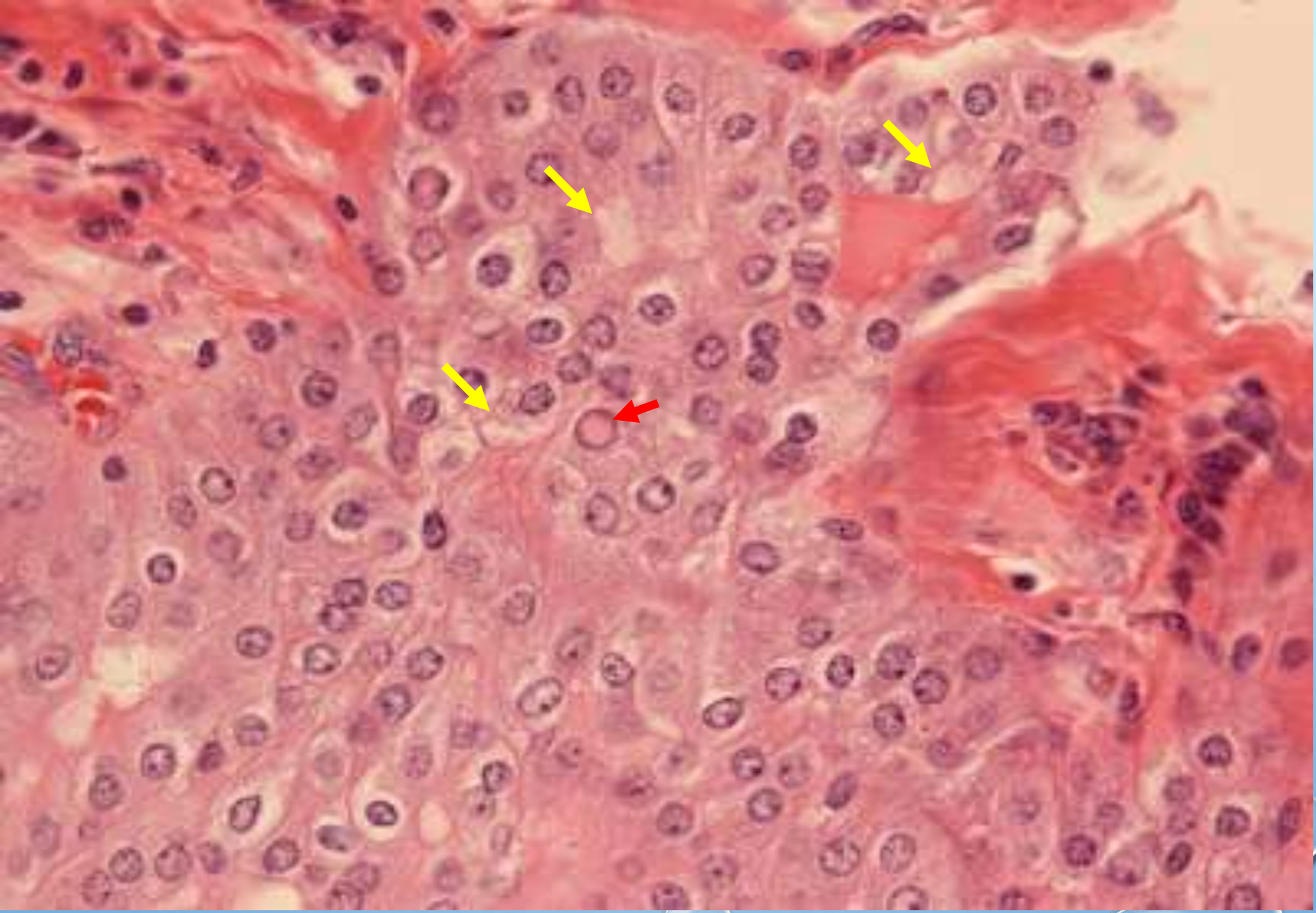
診断：Carcinoma

唾液腺組織の間に10x9mmの腫瘤性病変が認められ、比較的豊富な好酸性細胞質と円形から類円形核を有する腫瘍細胞が管状から充実性に増殖えしている。壊死は認められず、核分裂像は極少数であるが、唾液腺組織内および間質内への小集塊状の浸潤性増殖が認められ、上皮性悪性腫瘍の所見と考える。組織型の確定は永久標本で。



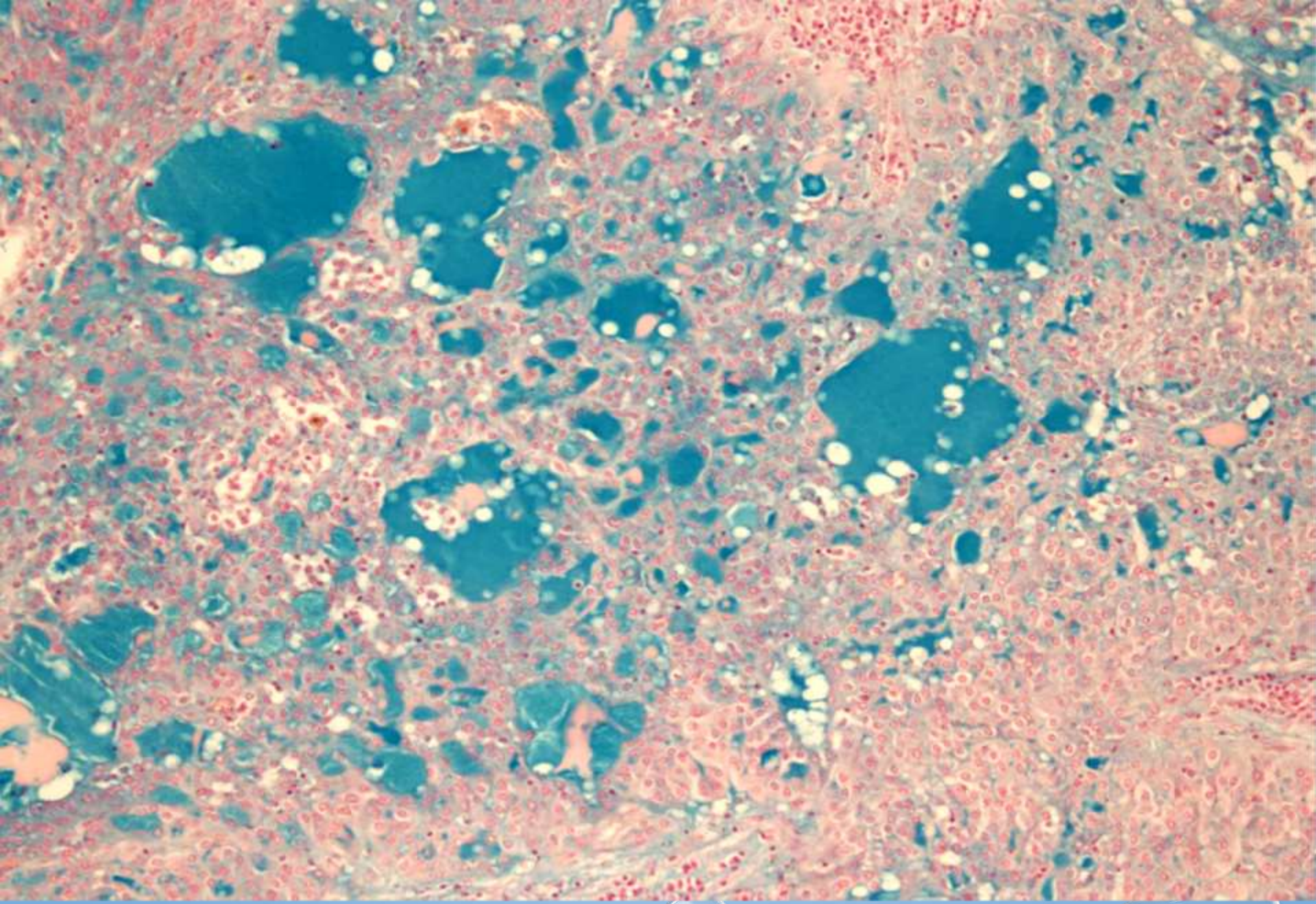
H E ×100

Japanese red cross
Kumamoto hospital



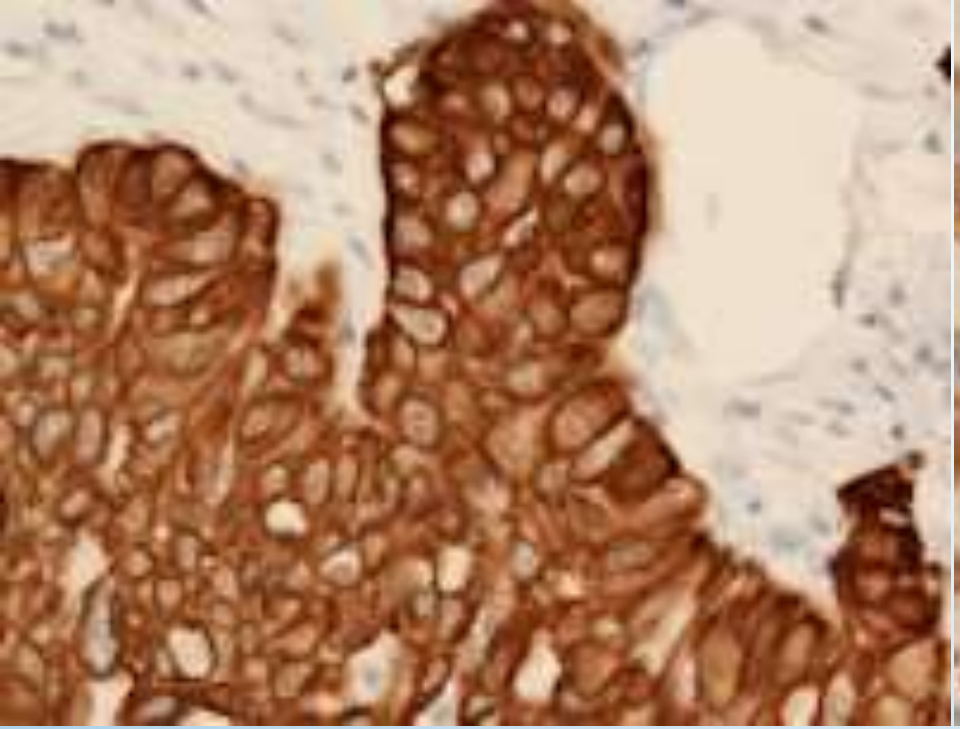
H E ×400

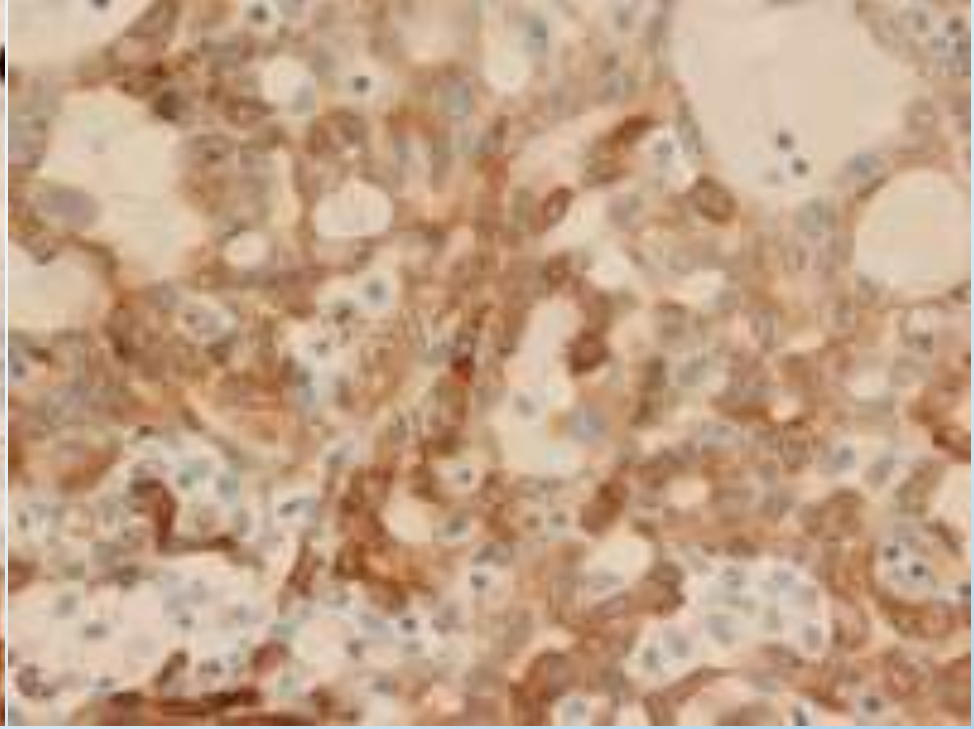
Japanese red cross
Kumamoto hospital

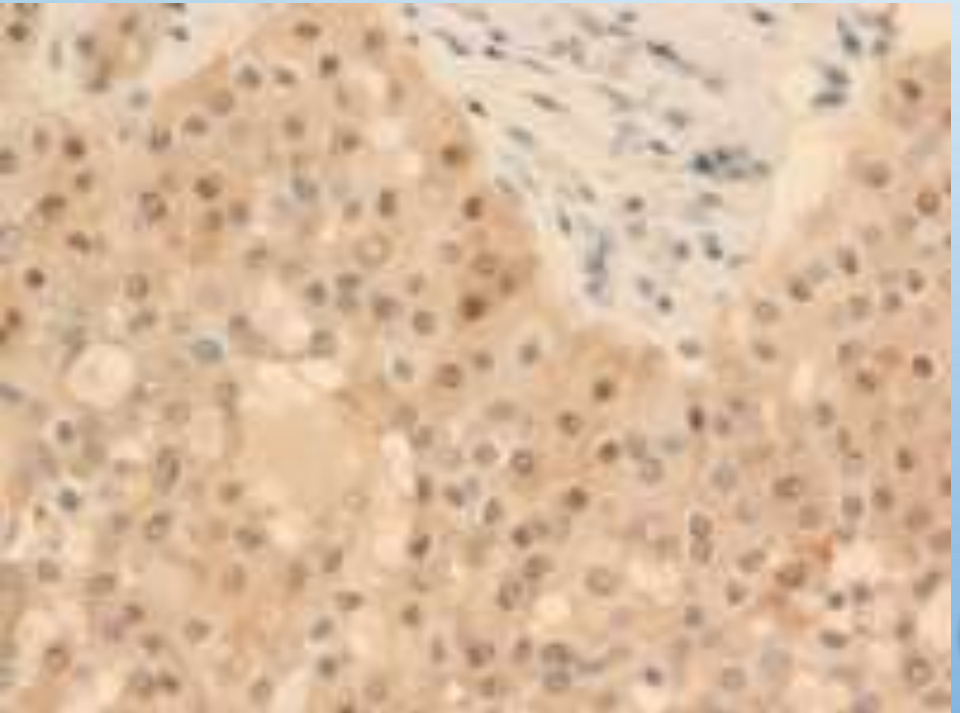


Alcian blue ×100

Japanese red cross
Kumamoto hospital







CK7：陽性	EMA：陽性
S100：陽性 （核、細胞質）	Mammaglobin： 陽性（熊大）

CK5/6、p40、p63は陰性

Japanese red cross
Kumamoto hospital

最終組織診断

Secretory carcinoma (mammary analogue secretory carcinoma), pT1

摘出された唾液腺内には最大径1.8cmの腫瘤性病変が認められます。腫瘍細胞は豊富な淡好酸性細胞質、円形から類円形の比較的monotonousな核、小型の核小体を有します。充実性、敷石状の配列と共に粘液(alcian blue 陽性)産生を伴う管腔構造が散見され、腺系の細胞が示唆されます。構成細胞は比較的均一で、明らかな粘液産生性の高円柱上皮、角化は認めません。

免疫染色で以下の様な染色態度を示します。

陽性:CK7, EMA, S100, mammaglobulin

陰性:CK5/6, p40, p63

以上の所見から組織型はMASC(mammary analogue secretory carcinoma)と考えられます。

推定組織型選択肢

① ワルチン腫瘍

② 多形腺腫

③ 基底細胞腺腫

④ オンコサイトーマ

⑤ 腺房細胞癌

⑥ **乳腺相似分泌癌 (MASC)**

⑦ 乳頭癌（甲状腺からの転移）

乳腺相似分泌癌
（mammary analogue secretory carcinoma ; MASC）

- 2010年に提唱された唾液腺腫瘍で乳腺の分泌癌に類似する。
- 乳腺分泌癌同様にt(12;15)(p13;q25)染色体転座の結果、融合遺伝子*ETV6-NTRK3*を持つ。
- 耳下腺に好発し、平均年齢46歳で、男性にやや多い。
- 低悪性度腫瘍と考えられている。
- 20%が頚部リンパ節転移、5%が多臓器転移に進展する。
- WHO分類2017では分泌癌（Secretory carcinoma ）に含まれる。

（組織像）

- 腫瘍細胞が微小嚢胞状、管状、嚢胞乳頭状、充実性に増殖。
- 管腔内粘液はPAS、Alcian bleu染色に陽性。
- 腫瘍細胞は均一で、しばしば空胞状の細胞質を有する。
- チモーゲン顆粒の存在は明らかでない。
- 免疫組織化学染色でmammaglobin, S-100 protein, Vimentin, STAT5aが陽性。

乳腺相似分泌癌

（mammary analogue secretory carcinoma ; MASC）

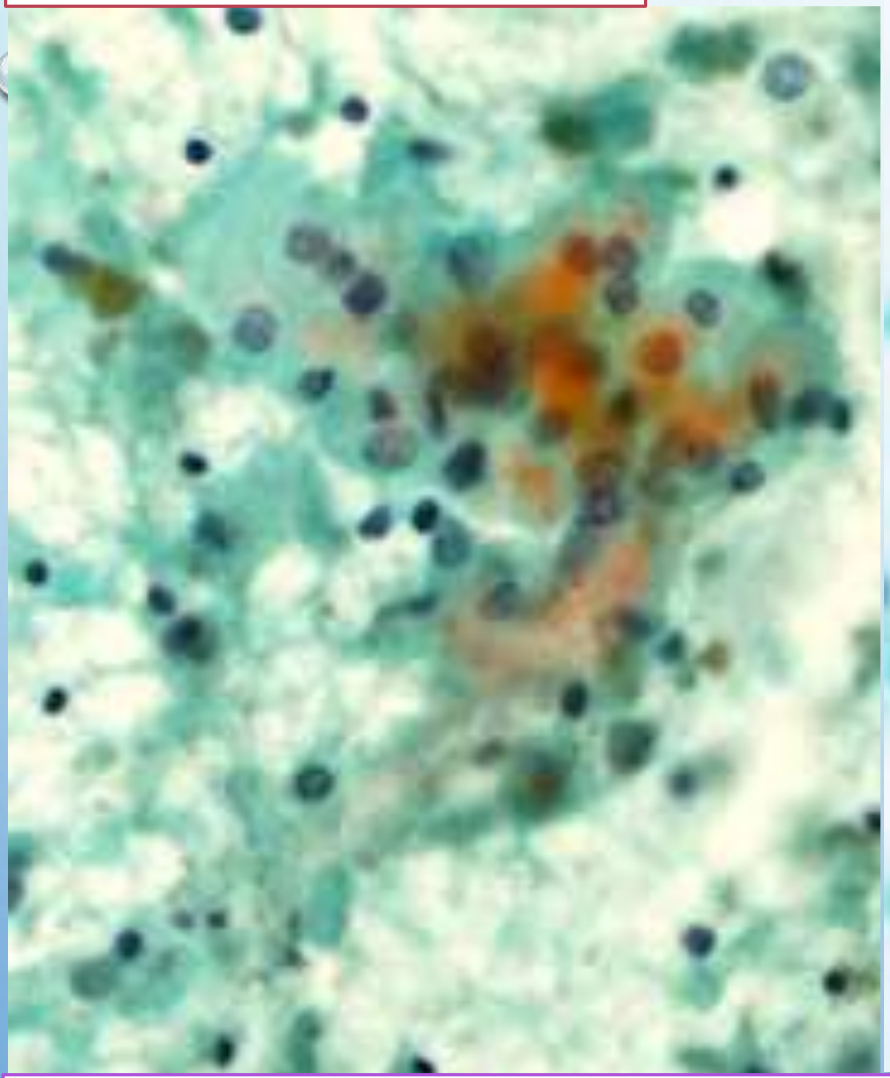
（細胞像）

- 結合性の低下した一様な腫瘍細胞が多数出現する。
- シート状、合胞体様、微小濾胞状、乳頭状、球状あるいは孤在性と多様。
- N/C比は小さく、核は小型から中型、核異型に乏しい。
- 細胞質に種々の程度の空胞状変化を伴う。
- チモーゲン顆粒は認めない。
- 核小体や好酸性細胞質がみられることもある。

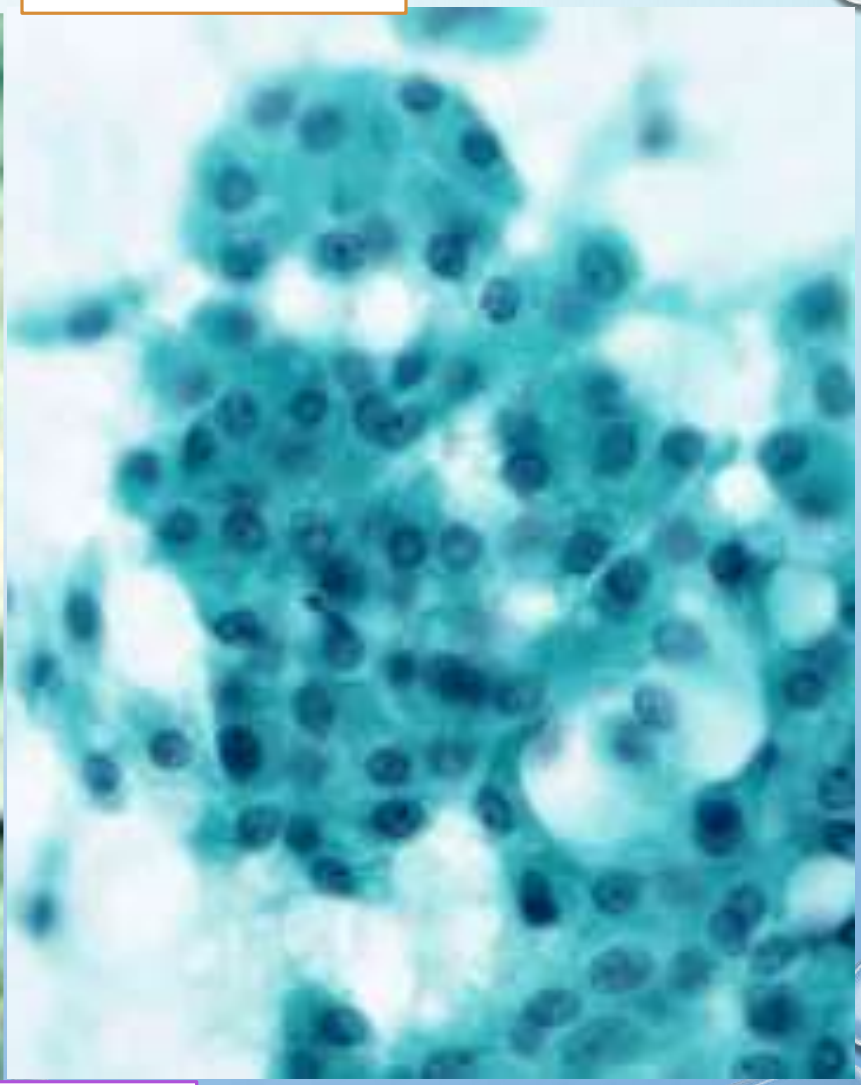
（本症例）

- 背景にMG染色で赤紫色を示す粘液を認めた。
- 結合性の低下した一様な異型細胞が出現した。
- 好酸性の豊富な細胞質を有し、空胞変性がみられた。
- MG染色で細胞質に顆粒を認めた。（由来は不明）
- 核異型は軽度だが、核内空胞が散見された。

ワルチン腫瘍



本 症 例

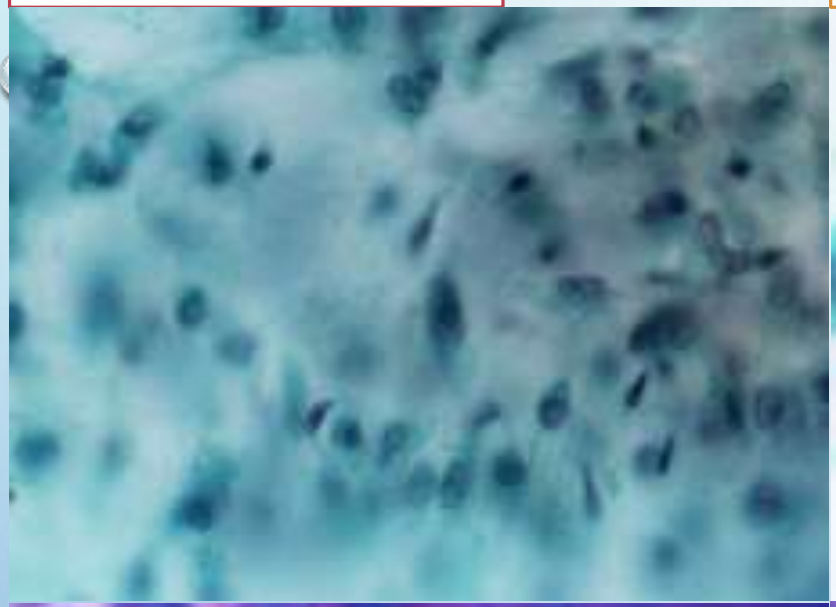


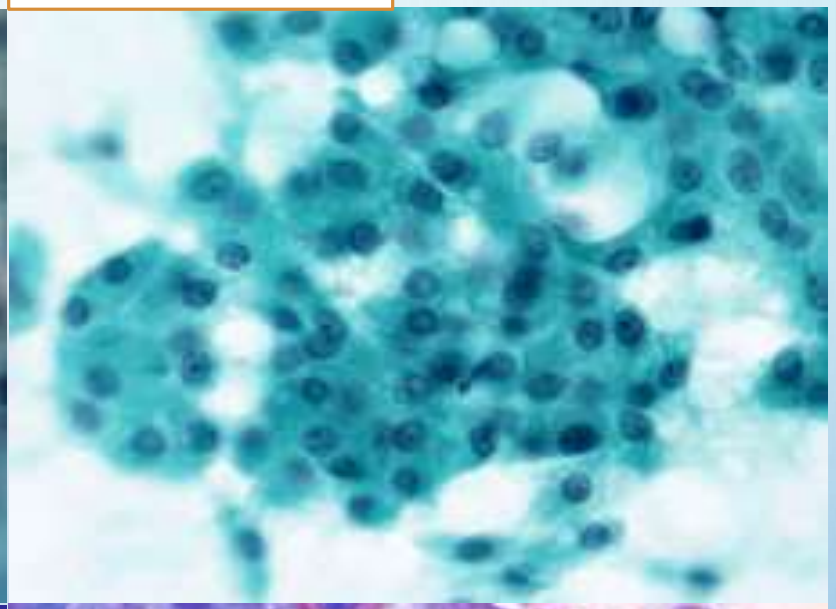
リンパ球との二相性、壊死性背景、泡沫細胞

Japanese red cross
Kumamoto hospital

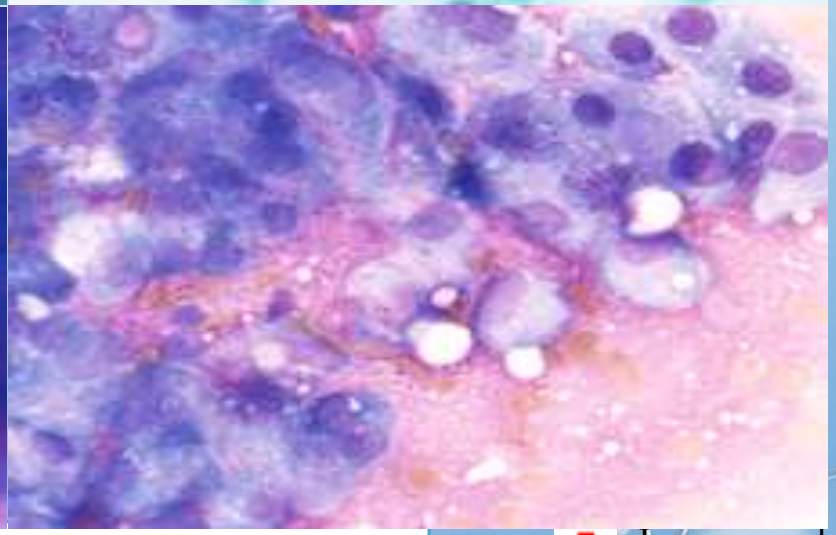
多形腺腫

本症例







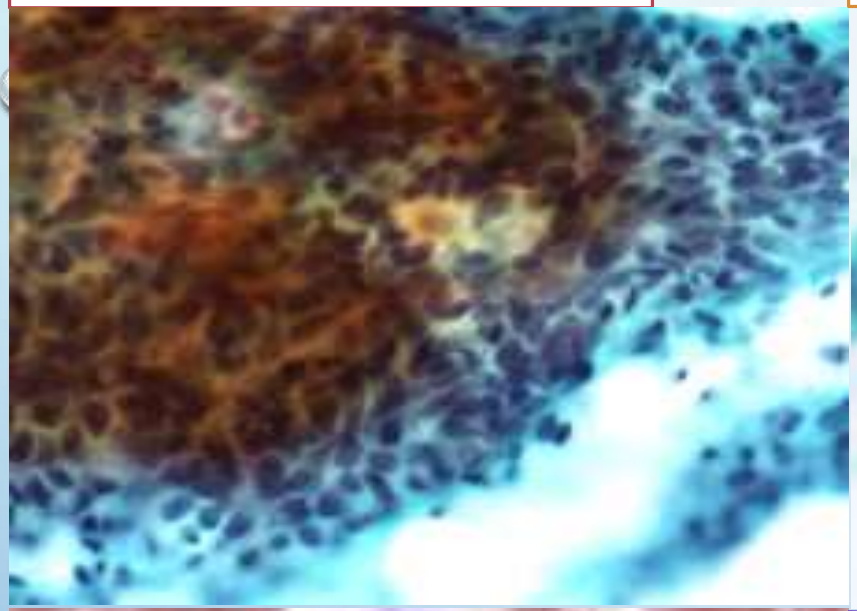


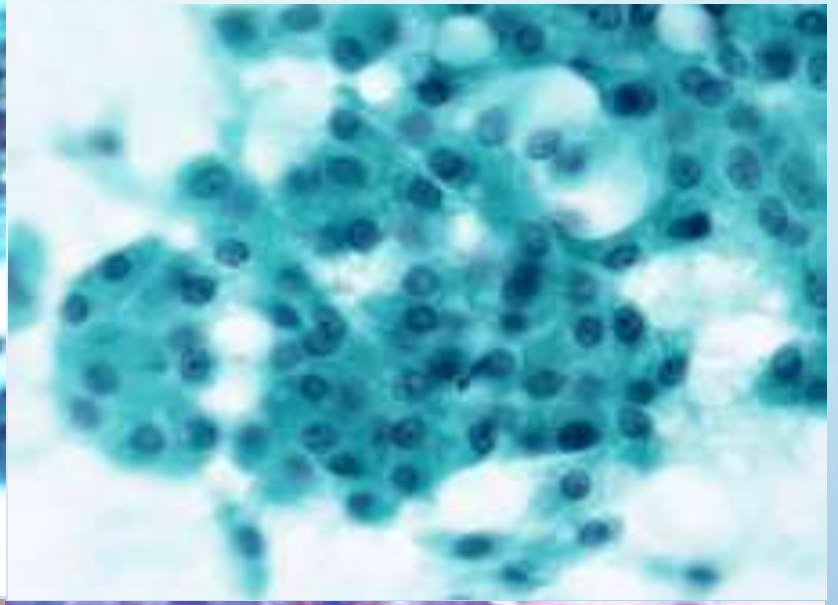
上皮性腫瘍細胞と筋上皮性の間質性腫瘍細胞、間質粘液

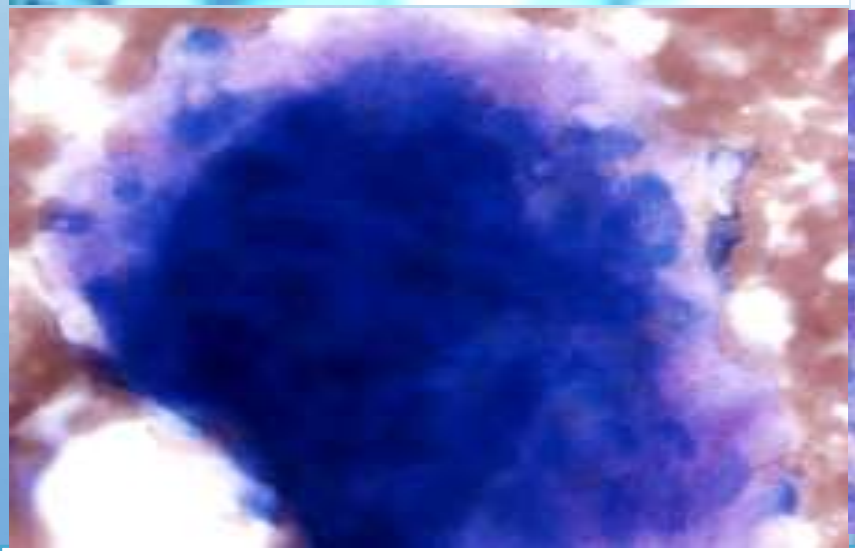
Japanese red cross
Kumamoto hospital

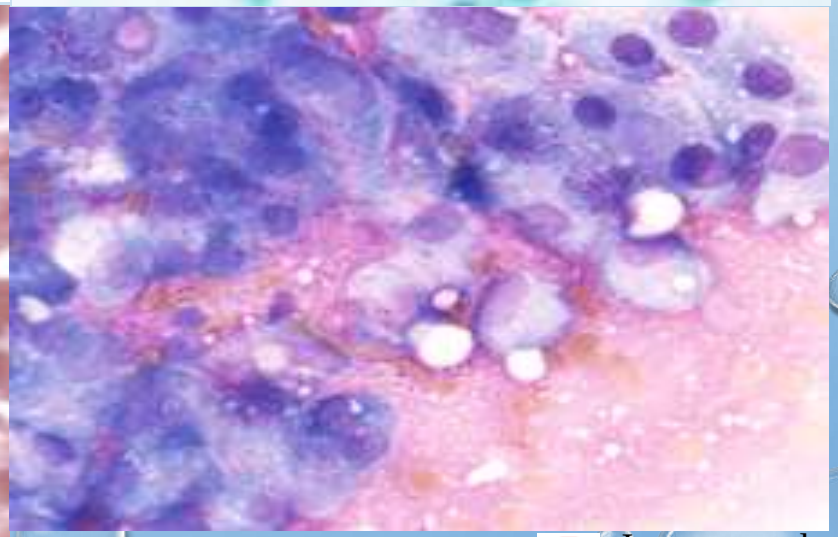
基底細胞腺腫

本 症 例







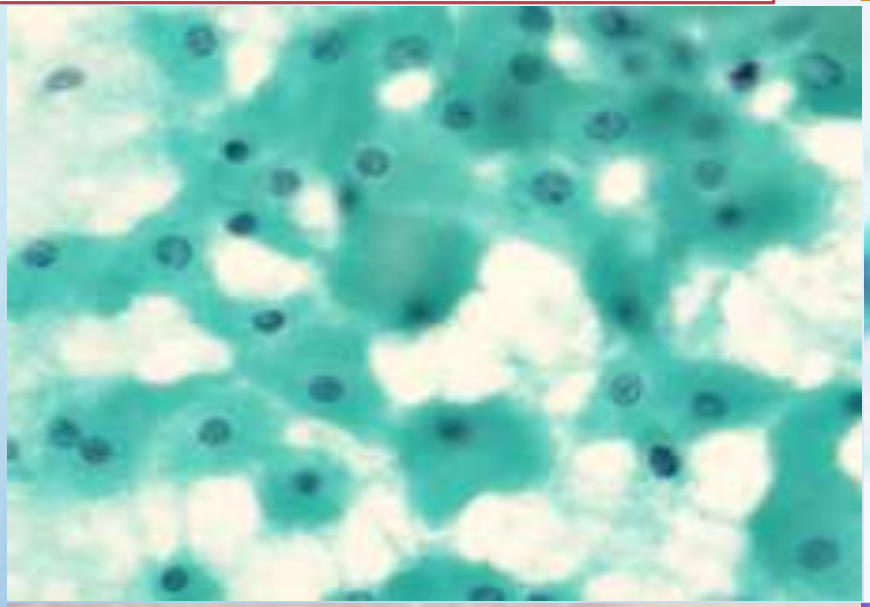


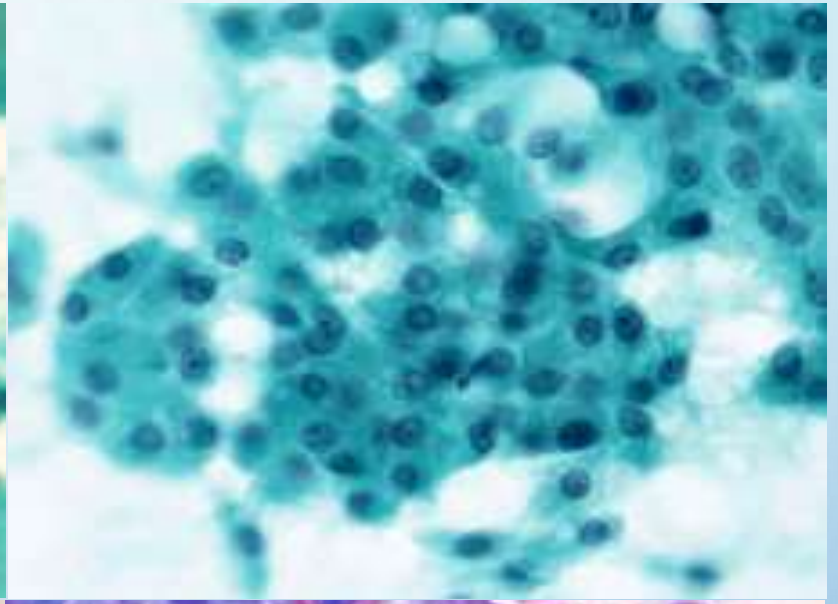
細胞境界不明瞭、基底膜様物質→集塊周囲に少量

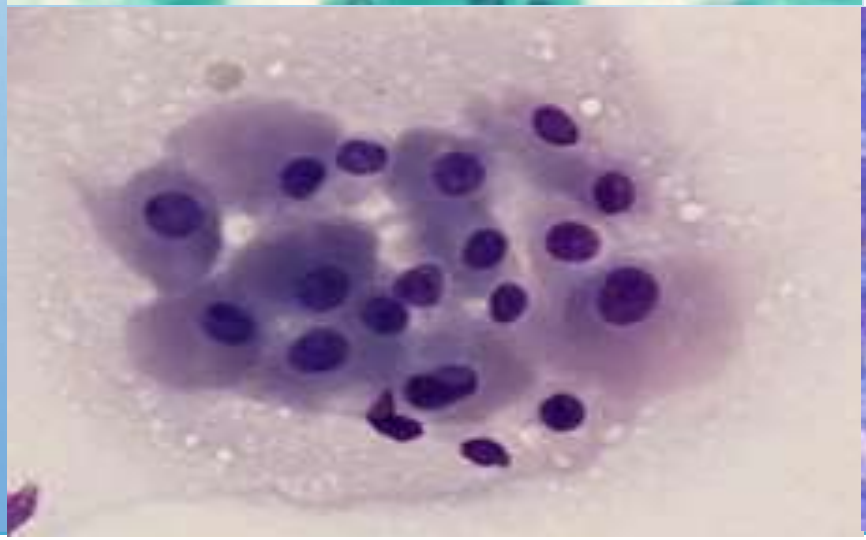
Japanese red cross
Kumamoto hospital

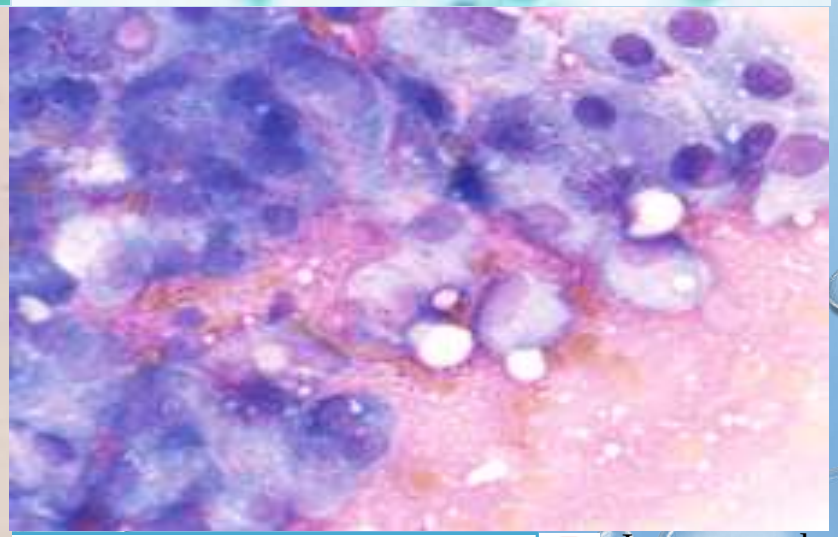
オンコサイトー

本 症 例





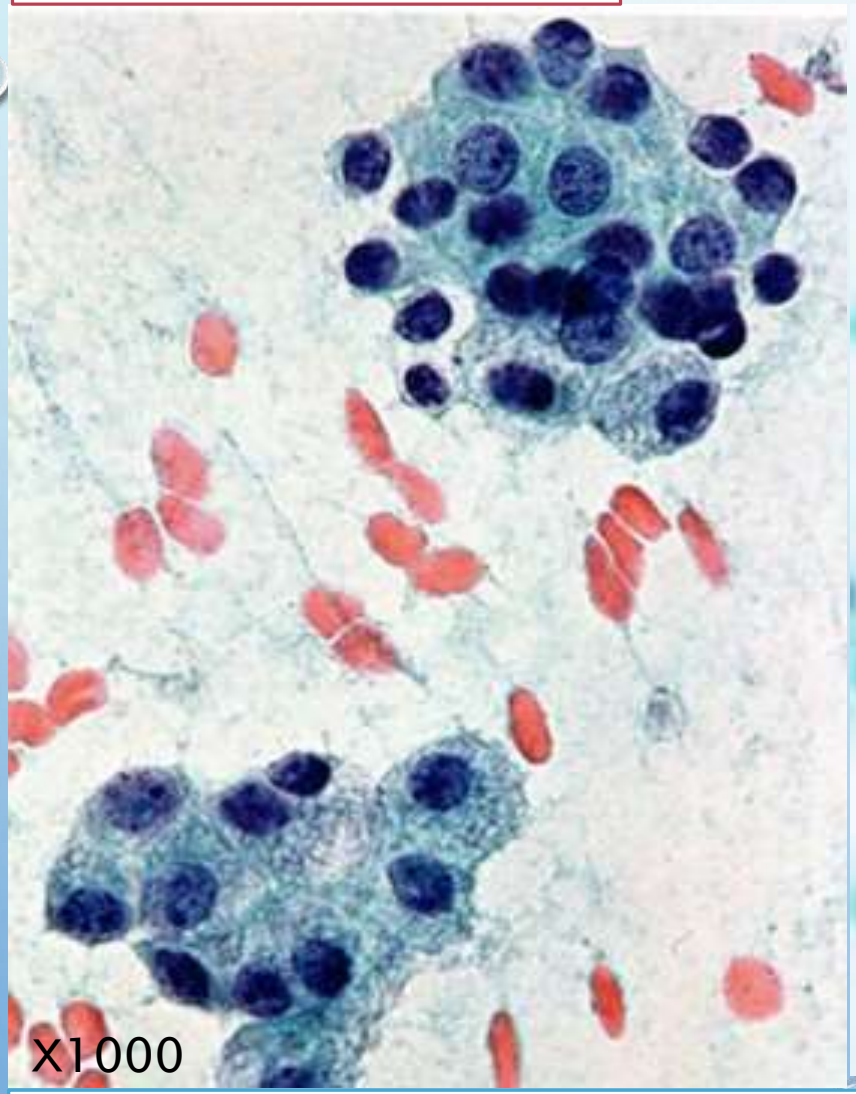




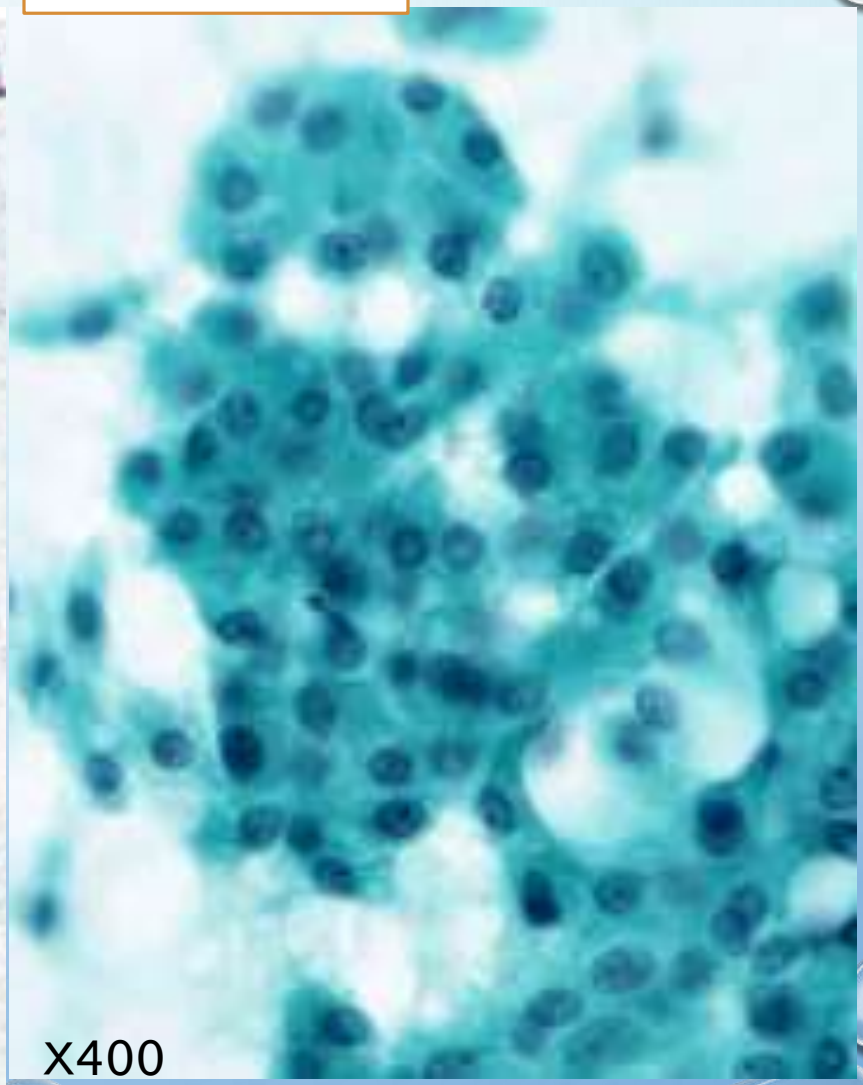
好酸性の強い顆粒状細胞質、細胞結合性はやや強い、粘液はない

Japanese red cross
Kumamoto hospital

腺房細胞癌



本 症 例

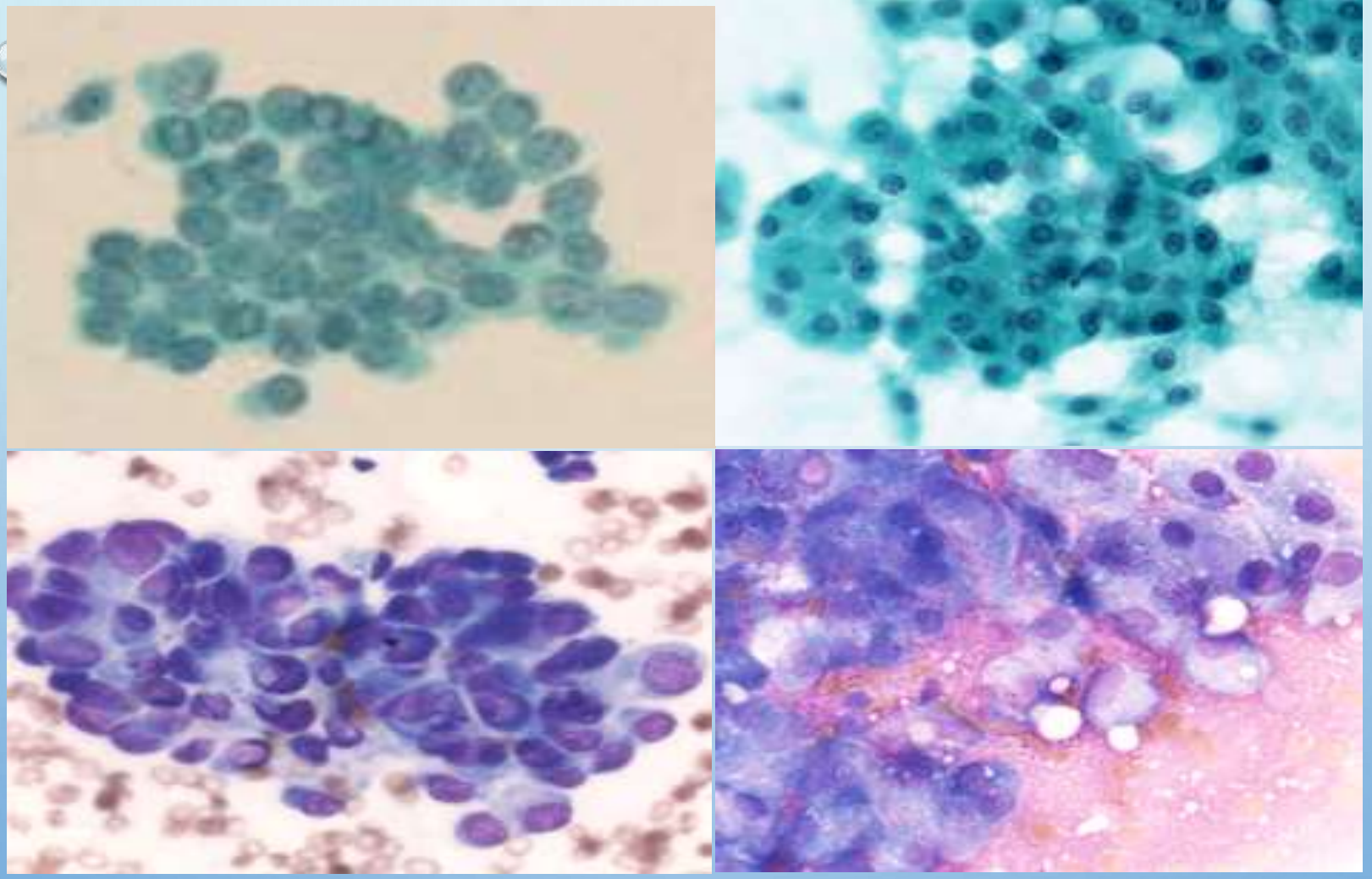


チモーゲン顆粒、腺房様配列、粘液はない

Japanese red cross
Kumamoto hospital

甲状腺乳頭癌

本症例



一般的に結合性は強い（シート状、乳頭状など）、N/C比増加、細胞質淡明胞、顆粒はない、微細顆粒状クロマチン（すりガラス状）、核溝

ご清聴ありがとうございました。

Japanese red cross
Kumamoto hospital